

義太夫猿蓑

棹

太



第七拾貳號

東京太棹社發兌

年 新 賀 謹

齒醫  
療療  
用用  
治治  
療療  
界界  
のの  
寵寵  
兒兒  
!!

會覽博大各於  
數多牌賞盃金產國良優賜



本 木 注 射 針

俳 號 本 木 大 熊

於東  
ける洋  
にに  
斯斯  
界界  
のの  
パイ  
ロロ  
ット  
!!

目 種 品 製

齒療用	醫療用
二十白	引不拔
ツ八	英國最優
ケ金	拔鋼化
ル金	鋼鐵
製製	鋼鋼
製製	製製

東京市瀧野川區中里四四七

本木注射針製作所

所主 本木梅治郎

電話水石川(85)二四三七番

出張所 東京市本郷春木町二ノ五

電話水石川(85)三四一〇番

研究所 千葉縣君津郡富岡村田川



# 神馬里芳女史の令孫

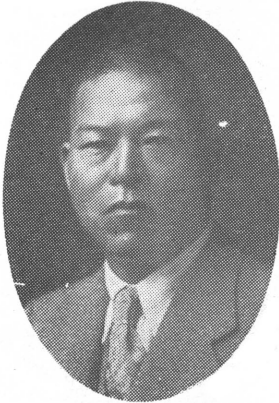
昨冬七五三お祝記念



(歳三)んさ子厚同(歳五)んさ子代喜同(歳七)んさ子禧馬神  
(歳七)んさ子ミエ川谷長の姪は右てつ向

昭和十年度の榮冠に輝く人々

栗原千鶴氏



第一回東西素義合  
同審査會(貳等)

伊藤藤松鶴氏



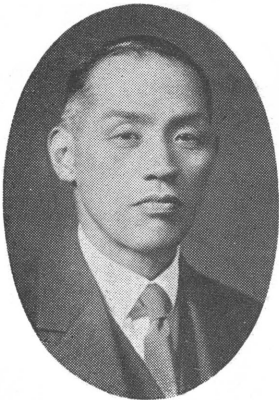
第一回東西素義合  
同審査會(壹等)  
第一回大東素義聯  
盟會(大東關)

的野關路氏



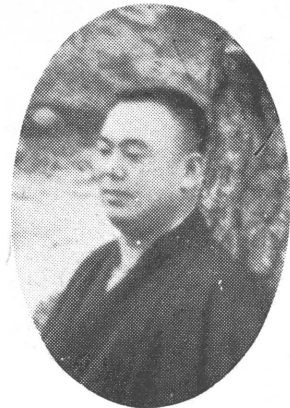
第三十三回東都五  
十義會(大東關)  
同廿四回(大東關)

吉田三芳氏



第一回東西素義合  
同審査會(參等)

和田春和氏



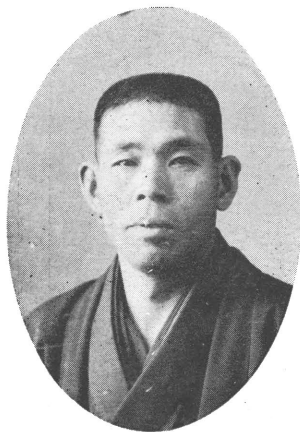
第三十三回東都十五  
義會(西大關)  
同廿四回(西大關)

(順位不)



昭和十年年度の榮冠に輝く人々

氏清川細



會義十五都東回三廿第  
(等壹)

氏水銀谷猪



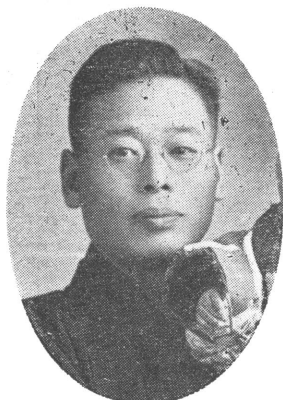
會查審盟聯義素京東大  
(關大西) 回一第

氏鳥都田藏



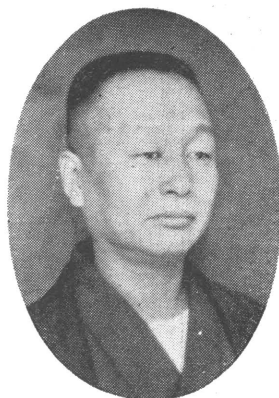
會義十五都東回四廿第  
(等壹)

氏六松小



會義十五都東回三廿第  
(等參)回四廿同(等參)

氏章朝本松



會義十五都東回四廿第  
(等貳)

(同 不 位 順)

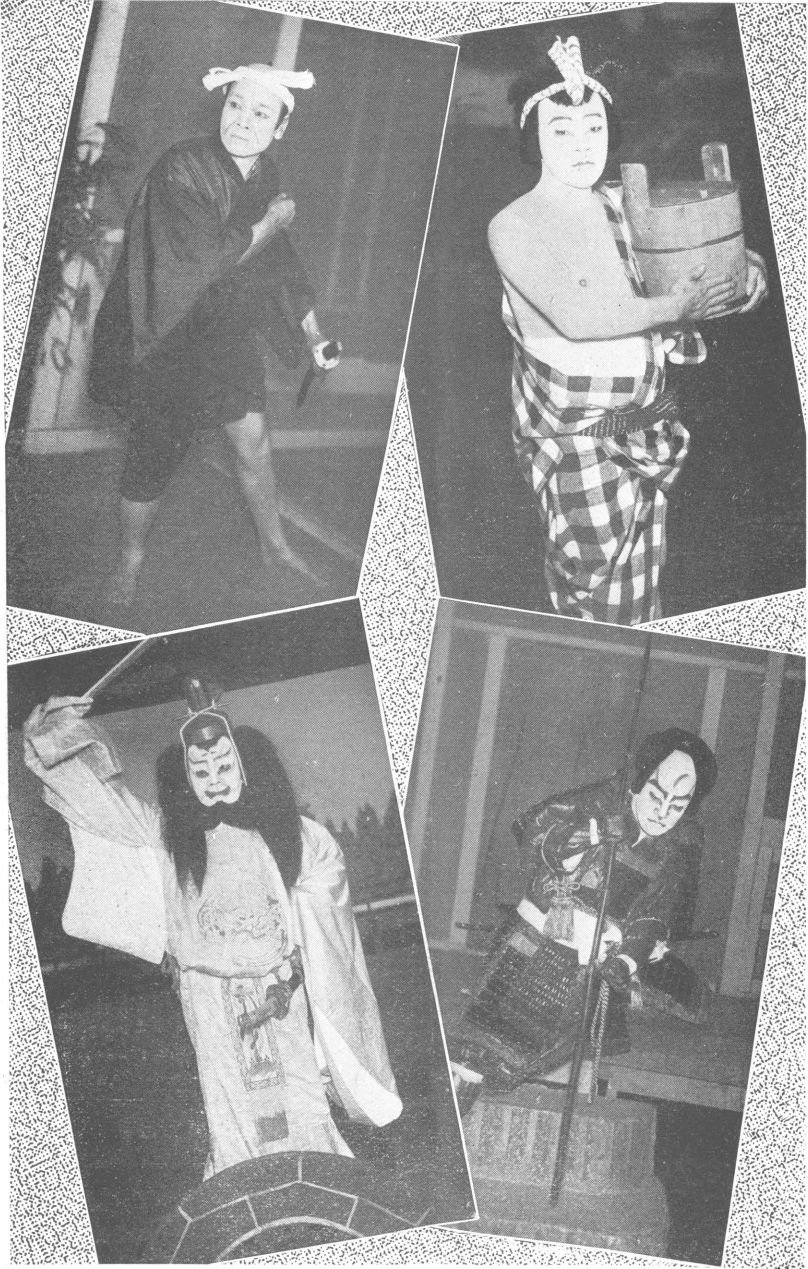
## 僧小天辨の氏鳳金田金

前號記載の如く、野澤道之助連の忘年義太夫會が舊臘並木俱樂部で催ほされましたが、大切濱松屋より勢揃ひの掛合は非常な喝采を博しました。寫眞はその時辨天小僧に扮した金田金鳳氏であります。





平井 榮・上井喜鶴兩氏の素劇



前號記の如く舊臘浅草戸座で素劇を演じ大て評博をまし  
前記の如く公平時の三役で奮闘し平井榮・秀光・太權は氏  
平井榮がたした見せられませぬは彌左工門を處い

# 都連初會記念記



前列向つて左より竹本都太夫・保々長半・國井やまと・松田光藏田郡鳥・藏田夫人・都太夫妻女京子の諸氏

後列向つて左より豊竹巖大夫・本社富取芳河士・松田氏執事原澤・鶴澤文之助・千登世・竹本都雀の諸氏。安藤郡昇氏は多用にて語り終ると歸宅、遺憾乍ら此撮影に洩れました。

(照 参 事 記)



# 華 々 人 の 義 素 米 在 な か や



桑港に於ける義大夫會は頗る盛會なるものでありますが、寫眞は先般桑港ホールに於て豊竹照大夫送別義大夫會の記念で、杉山陶岳氏は一昨年より、本社の支部として活躍、熱心な愛義家であります。なほ同氏を始め、眞玉、廣玉、榮玉、一昇、徳昇、西柴の諸氏は本誌後援名譽會員であります。

前列右より細田マサ・豊竹照大夫・細田眞玉・中列安田保鶴・太田淺枝・大田小富・小林才駒・後列杉山陶岳・兼廣廣玉・武榮玉・平野一昇・安河内氏柳・三枝松城南・田中一男・武田徳昇・喜多生駒・西本西柴の諸氏

（にてに館葉紅・芝） 要法日ケ百翁丸茂山杉



舊臘、其日庵杉山茂丸翁の百ケ日に相當するいちにち、故人と昵近の人々が芝の紅葉館に集つて翁の追悼談に思ひを新らたにされました。

寫眞は前列向て右より、鶴澤好司・福島行信・下郷傳平・故翁未亡人・令嬢・田中平八・後列同平葉龜之助・本郷作太郎・柳原伯・副島八十六・安藤どくろ・久保徳次郎の諸氏、前列は竹本素女師、外門下



年 新 賀 謹

---

安藤どくる

謹 賀 新 年

白 井 清 華

金 田 金 鳳

謹 賀 新 年

---

東 都 五 十 義 會

謹 賀 新 年

大用大嘉津

福田都

廣瀬いろは

寺岡三幸



謹 賀 新 年

大東京素義聯盟並審查會

會長 寶藏寺天昇

顧問 中澤巴

顧問 鈴木松寶

專務理事 青山峰水

常務理事 細川清

技藝部

名譽顧問 豐澤松太郎

名譽顧問 鶴澤勝鳳

顧問 竹本津賀太夫

顧問 梅本香伯

顧問 豐澤猿之助

事務所

杉並區和田本町九五一番地

竹本巴津昇方 電話中野五七九三番

謹 賀 新 年

中

澤

巴

謹 賀 新 年

堀

と  
き  
わ

勝  
川  
勝  
川

嵐

木

下

呂

壽

司

光

謹 賀 新 年

---

近  
江  
清  
華



謹 賀 新 年

良 友 會

豐	野	坂	赤	直	田	加	岡	大
澤	口	倉	尾	井	林	藤	田	築
良	み	素	梅	雛	南	福		
造	な	遊	笑	司	海	勝	源	葵
	と							

都 連

竹	竹	安	中	藤	國	藏	松
本	本	藤	村	田	井	田	田
都	都	都	光	其	や	都	
太	都	昇	子	晶	ま	鳥	
夫	雀				と		光

本所區吾妻橋一ノ十九

謹 賀 新 年

伊	長	星	吉	安
藤	谷	野	田	藤
松	川	桔	三	光
鶴	文	梗	芳	樂
	久			

(イロハ順)

謹 賀 新 年

---

鈴  
木  
松  
寶

年 新 賀 謹

五 聲 會

事 務 所

井 上 聲 鳳 方  
京橋區銀座西六丁目五番地  
電話銀座一六七二番

朝 見 會

野 中 一 竹  
白 井 井 孝  
松 岡 波 朝  
平 井 壽 樂  
竹 本 朝 見 太 夫



年 新 賀 謹

箕  
浦  
其  
甫

須  
賀  
一  
鳳

湯  
原  
清  
司

原  
田  
越  
巴

謹 賀 新 年

小  
林  
和  
舟

岩  
田  
未  
成

佐  
野  
美  
昇

年 新 賀 謹

會 松 義

豐	豐	田	三	村	井	正	及
澤	澤	中	口	田	上	田	川
松	松	司	松	玉		大	
四	造	若	藤	賞	巽	龍	旭
郎							

會 秀 綾

竹	島	笹	崎	山	南	大	石	石
本	田	本	村	田	條	谷	塚	川
綾	綾	竹	翠	壽	壽	大	歌	治
秀	登	始	鳳	瓢	光	瓢	吉	光

(不口八順)

年 新 賀 謹

---

野 澤 道 之 助  
細 川 清



# 野澤桑造連

謹

賀

新

年

吉西田秋高高川島間長沼野

田田中枝橋山端田宮島井沼澤

登登可竹長榮高小喜天喜盛盛盛桑

盛松駒門玉峰久賞ら國香鶴造世

床世話

千

登

(ころは順)

謹 賀 新 年

松岡茂里雄

吉川浪補

松本朝章

平野ろ昇

謹 賀 新 年

武  
笠  
宏  
亮

清  
水  
彌  
生

的  
野  
關  
路

橫濱  
霜  
島  
錦  
司

謹 賀 新 年

聲 友 會

鎗	金	松	中	竹	竹
田	田	岡	野	内	内
み	田	語	吳	た	と
や	金	松	羽	も	を
こ	鳳			つ	る

(イロハ順)

芳 聲 會

豐	千	清	一	自	榮	辰	里	井
澤								
芳								
太								
郎	壺	芳	重	笑	壽	芳	筒	

(イロハ順)

謹 賀 新 年

巴 津 天 會

會 長

寶 藏 寺 天 昇

常 務 事 務 武 藤 壽 昇

顧 問

竹 本 巴 津 昇

事 務 所

杉並區和田本町九五一番地  
竹 本 巴 津 昇 方  
電 話 中 野 五 七 九 三 番

謹 賀 新 年

鈴木和樂

猪谷銀水

河野國聲

嘉喜村巴常

謹 賀 新 年

松  
岡  
語  
松

樺  
太  
宮  
下  
杉  
鳳

謹 賀 新 年

鶴 玉 連

國井やまと

小泉柳汀

久保田喜鶴

三村鶴三

水戸部壽

福田柳蝶

鶴澤鶴玉

日 之 出 會

浮谷祖樂

高野昇

稻葉福代

佐久間三司

高野喜代子

竹本三福



年 新 賀 謹

竹 韻 會

保 々 長 平  
竹 内 た も つ  
松 尾 武 市  
松 尾 湊  
鈴 木 一 朝

(イロハ順)

# 野澤道之助運

謹賀新年

野	高	中	川	金	細	今	柳	及	柳	中	和
澤	山	奈	田	川	出	川	澤	田	田		
道	瀨	部	金	金	さ	有	悟	五	春		
之	操	銀	彌	鳳	き	明	旭	鈴	口	和	
助		司	清	清							

(イロハ順)

謹 賀 新 年

渡會うつほ

平井榮

木村さかえ  
井田菊泉  
竹本相模太夫

年 新 賀 謹

乃 村 乃 菊

瀧 脇 ま つ ば

大 澤 二 四 喜

高 瀬 操

保 谷 紅 司

倉 田 登 喜 和

綿 貫 六 助

波 多 野 三 樂

謹 賀 新 年

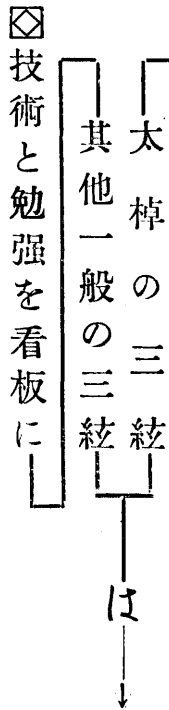
日本 義太夫 因會 帝都

事務所

荒川區日暮里二丁目一〇七  
電話 下谷 七八六七番

◇ならぬ三味線はおもちやでござる

◇持て生れた名匠氣質



◇技術と勉強を看板に

◇時節柄破格の大割引

御一報次第参上如何様の御相談にも應じます

義太夫三絃師

菊 屋

十 河 鑄 吉

神田區小川町三丁目九番地

電話 神田一八四二番 (本岡呼出)

謹 賀 新 年

豐

澤

松

太

郎

豐

澤

猿

之

助

豐

澤

芳

太

郎

謹 賀 新 年

本誌印刷済み後老  
母逝去、喪中とな  
りましたにつき、  
本誌上には年賀欠  
禮致します。

鶴  
澤  
司  
好

豊  
澤  
猿  
藏

豊  
澤  
猿  
三  
郎

鶴  
澤  
辰  
六

謹 賀 新 年

貸席 金松亭

荒川區日暮里二丁目一〇七  
電話 下谷 七八六七番

竹本津賀太夫

豊澤團八

鷹の羽會

豊澤宗之助

鶴澤寛三郎

鶴澤絃平

竹本近衛太夫



謹 賀 新 年

竹  
本  
素  
女

竹  
本  
駒  
若

竹  
本  
佳  
照

鶴  
澤  
好  
造

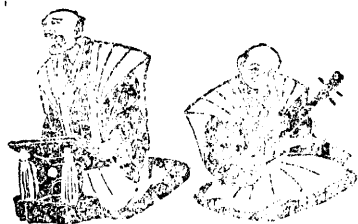
鶴  
澤  
清  
一

鶴  
澤  
豐  
助

年 新 賀 謹

見臺・肩衣 大阪屋

淺草區向柳原町二丁目十二番地



大正十四年正月  
演目次  
見臺・肩衣  
本屋大阪屋

神田區錦町三ノ廿四

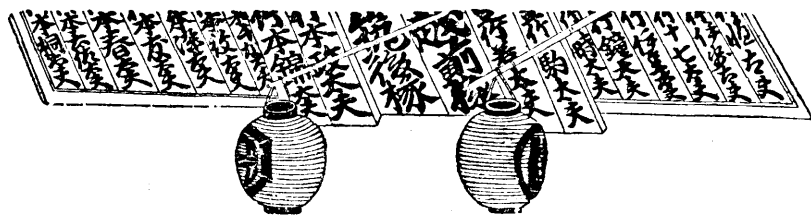
貸席 錦 橋 閣

電話神田三六八七番

座 一 劇 り ぶ 身 座 魁

番一九〇七草淺話電(四廿町葉松區草淺) 所務事

坂	野	頭	魁	太	坂	坂	中	尾	坂	坂	坂	坂
外	野	頭	魁	太	演	坂	坂	中	尾	坂	坂	坂
交	村	取	家	夫	出	東	東	村	上	東	東	東
部	武	家	廣	元	指	勝	千	吉	扇	秀	照	榮
井	夫	丸	丸		揮	信	代	彌	菊	歌	代	治
勝						東	治	治	彌	歌	代	治
之						次	治	治	彌	歌	代	治
助						次	治	治	彌	歌	代	治
						次	治	治	彌	歌	代	治



(行發回一月毎) **棹 太** (日五廿月一年一十和昭)

◆ ◆ ◆ 號貳拾七第 ◆ ◆ ◆

▼寫 眞

神馬里芳女史令孫のお祝ひ・昭和十年度榮冠に輝く人々・都  
 連發會記念・金田金鳳氏の辨天小僧・平井榮井上喜鶴氏の素  
 劇・在米素義の人々・杉山其日麻翁百ヶ日

- ▼淨瑠璃に現はれた亡靈の研究……………小泉蛙鳴(二)
- ▼文樂樂屋圖繪……………宮尾しげを(四)
- ▼女流六人物語……………平山蘆江(六)
- ▼義太夫雑話……………齋藤拳三(三)
- ▼素義風流線……………芳河士丸(四)
- ▼ラヂオ淨曲漫評……………金王丸(五)
- ▼迎春所感……………寶藏寺天昇(五)
- ▼淨曲雜考……………綿貫六助(九)
- ▼本社主催義太夫會出演芳名錄……………(三)
- ▼師走の美談……………中島山鳥(四)
- ▼所感……………藏田都鳥(四)
- ▼淨曲振興會(十二回)……………(天)
- ▼太棹社彙報……………(六)
- ▼各地通信……………石渡鐵牛・杉山陶岳(三)
- ▼編輯後記……………芳河士記(三)

# 淨瑠璃に現はれた亡靈の研究

小 泉 蛙 鳴

## (一) 緒 論

「生き替り死に替りこの恨やわか晴らさでおくべきか」といふ斷末魔の女の悲鳴が、後の幕になると、「ても恐しき執念やな」と見得を切らせる迄、次々に早變りを用ひて殺手の俳優を散々に苦しめ、同時に観客に物凄さを感じしめるのが夏芝居の定法となつてゐたが、時勢の推移と共に、お岩でも累でも、お客をぞーつとさせる代りにえへらく笑はせるようになつて仕舞ひました。

これは勿論、科學の發達が亡靈の存在を否定した爲めでもありますが、一方にはその時代の好みが亡靈と亡靈に惱まされる相手との交渉にかなり大きな影響を與へてゐるといふ事實も見逃せないと思ひます。

私は歌舞伎芝居を観たり、脚本を讀んだり、淨るりを味つたりする際に「相手拘はず、場所を選ばずに出現する亡靈」「恨のある相手丈けを苦しめる亡靈」「神經病だと斷定される亡靈」「恨のある人に見えなくて全然關係の無い人丈けに

見える亡靈」等の變遷に對して漠然と興味を感じてゐましたが、精神病醫として妄想や幻覺に苦しんでゐる患者に接するようになつてから、一層それに對する興味を深くさせられたので、職務の餘暇を利用して、「日本演劇と亡靈の變遷」といふ文章を纏めたいといふ大望を抱き、その内で淨るりに關係のある部分丈けを本誌に發表させて貰ふ事にしました。

扱て、淨るりと申しましても記録の上に淨瑠璃節の名稱が現はれてから五百年、「淨るりと云へば近松」と即座に聯想される位有名な近松門左工門の出現以來二百五十年、その間に作られた淨るりの總數なんて見當も附かぬ位數が多いし、文献を集めるのも容易ではありませんので、此處では近松以前の古淨るりは省きまして近松の作品から手を附ける事に定め、その材料として興文社の日本名著全集中の近松名作集、大近松全集刊行會の大近松全集、春陽堂の近松門左工門全集を選び、その他の近松に關する研究書を参考に用ひますが、世界的の大偉人として珍らしくか、或は大偉人なるが故に却つて諸説紛々たるのですか、未だに巢林子の出生地が決定して

ゐなといといふ状態ですから、従つてその處女作に對しても色々の説があるらしく、大近松全集の編著者木谷蓬吟氏は「一説には『花山院后評』を近松作と推定されて居るが、私にはまだ充分な確信がない」との意見から『赤染衛門榮花物語』を第一作と推定して居られるし、近松名作集の解説者黒木勘藏氏は第二作の主旨が近松二十五歳の作品たる歌舞伎脚本『藤壺の怨靈』と本質を同じうし當然同一作者の手によつて次第に展開せらるべき脚色と見られる事」第二「近松六十歳の作で『花山院后評』の改作たる『弘徽殿鷲羽産家』に原作の道行文がそつくりその儘用ひてある點が、二十四歳の作『瀧口横笛』と六十三歳の作『娘歌加留多』との間に認められる」等の理由から『花山院后評』を處女作と推定されて居る。

私には兩説を斷定する學識は全然持合はさないが、黒木氏の篤學振りは常々友人から聞かされてゐたし、その論說に現はれて居る眞剣な態度から黒木氏説を採用して私の研究も『花山院后評』から始める事に致しました。

次に、これから私の書く文章に屢々現はれる精神病學的の術語はそれ／＼適當な個所で説明する豫定ですが、先づ蛇足乍ら現在の精神病學で亡靈を如何に解釋して居るかを附加させて貰ひます。

科學の進歩した今日、亡靈なんて出る筈がないと承知し乍ら、確かに亡靈を觀たと言つて恐れてゐる人が居ますが、それはその人の精神状態の異常に依るので、その人の觀た亡靈

の姿は幻視或は錯視、その聲は幻聽或は錯聽、その人が冷たい手で觸はられたといふのは幻觸或は錯觸といふ知覺の異常であります。幻覺と云ふのは主觀的な架空な知覺で、外界には何も其本になる刺戟がないのに知覺する事、即ち自分以外誰も居ない室に居て何等物音のしない時に人の喋る聲がハッキリ聞えた場合を申しますし、錯覺といふのは外界の刺戟に不相當な知覺を生ずる事、即ち例の「幽靈の正體見たり枯尾花」つて奴です。

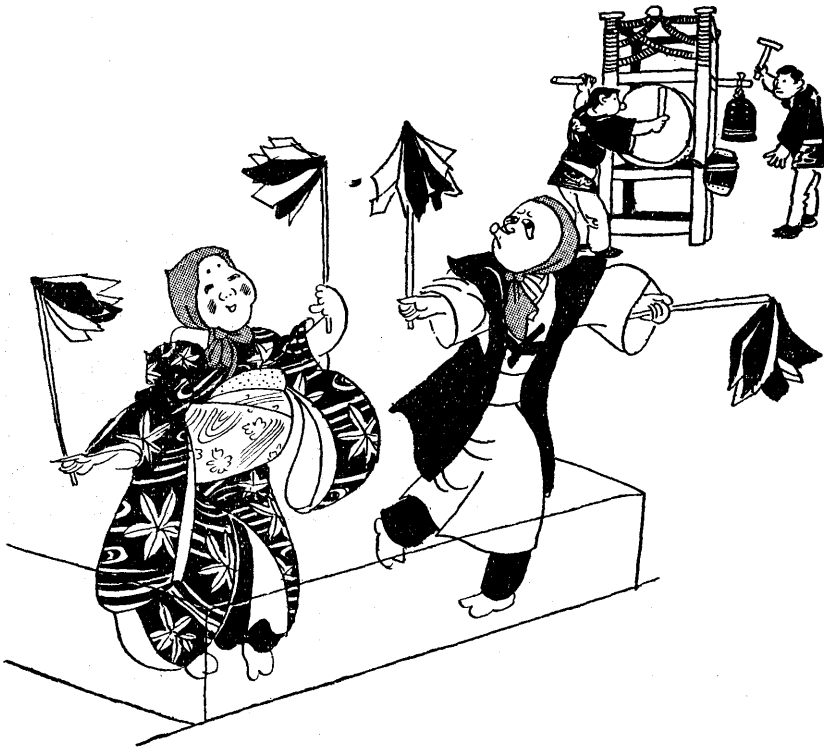
尙、幻覺、錯覺に關聯して、判斷辨識の障礙、信念の錯誤に基づく妄想やそれより軽い念慮と名附ける精神異常が互に原因結果の役割を勤めます。

殺人犯がその殺人行爲に對する後悔の念が起つて來た場合に、殺された人の恨を色々考へて、その苦しさから逃れる爲めに酒を呑んで酔拂つた折に軽い錯覺を生じ、それが原因で誰かに追跡されてゐるやうに感ずる追跡妄想、自分が殺されるといふ被害妄想、自分と全然無關係な新聞記事や人の話聲を一々自分に關係付ける關係妄想が起り、それが亦土臺になつて色々の幻覺や錯覺が生じて一刻も落付いて居られない不安状態に陥る経路は屢々小説、映畫、演劇等に仕組まれてゐますから御承知の事と思ひます。

以上述べました妄想幻覺といふ見地から私は淨るりに現はれる亡靈を説明したいと思ひますが、どうしても説明の附かぬ場合もあります。これはその時代の思想を反影して居ると考へれば亦別の興味が湧くかも知れません。尙、私としては出來る丈け平易に書く豫定ですが、若し堅過ぎたり、間違つた事を書きましたら御注意下さいますれば私としては悦んで訂正するつもりです。

(一九三六・二六)

# 文 樂 樂 尾



## ◆しころ打ち◆

正月になると大阪の芝居小屋では、終幕になつて客が退場する時勘定場の上で「しころ打ち」と云つて、しよつとことおかめの面を被つた二人が、紅白の布をつけた、はたきの様になつた幣を振ひながら「評判たアのむく」と云ひながら踊ります、普通の芝居は下座太鼓が入りますが、文樂のは太鼓に鐘です。

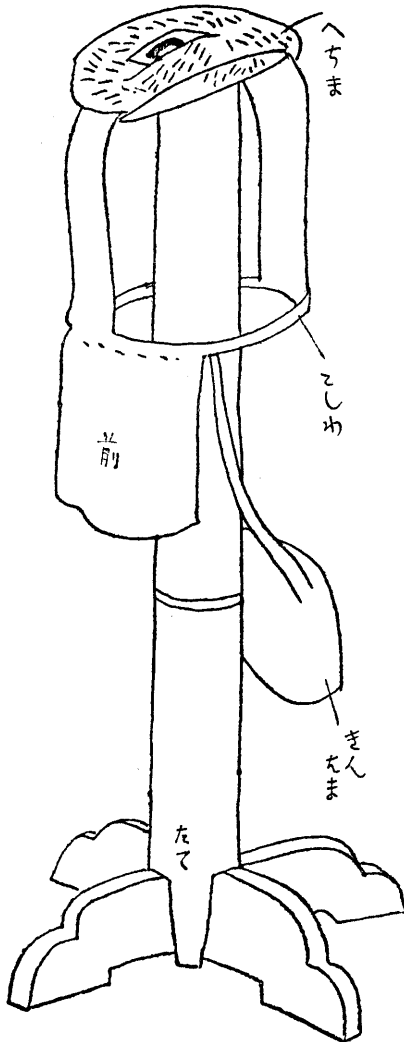
ドンドン カンカン ドンカンドン  
カン テンテンテンと囃子が入ります、それに合せて野球の應援の様に幣を振ります、これは正月興行に限りです。

# (一十) 繪 圖 屋

を げ し

## ◆ 女 人 形 の 胴 ◆

女人形の胴は先に發表しました男胴と對照してみても大へんに違ふところがあると思ひます。一番のところはへちまを使つてゐることは同じです。手は男形と同じ様につきますが、女人形に限つて普通は足のないのを定法とします。子役女形、鏡山の岩藤、お初、裾をからげた人形はどうしても足の必要上、定法は破りますが、足がない爲に人形に安定を必要とする爲、きんたまと稱す袋を腰輪のところからブラ下げます。女人形にこの袋は皮肉であります。操つる上には無いと工合が悪いのであります。



# 女流六人物語

平 山 蘆 江

女義太夫について、何か書いて見たい心持にたたられながら、歌舞伎座の四階に坐つてゐた。

去年の暮、杉山茂丸先生の追悼淨瑠璃會の時である。そこへばつたり出會つたのが富取芳河土君だつたので、

「太棹に何か書きませうか」と、實はこつちから云はうとしたのだつた。

併しあの時は無やみに忙がしい最中だつたので。しつかり約束して置きながら、すつぽかして了つた。

今になつて、あの時の女流義太夫會を書くのもヘンだが、併し何しろ満員以上の來會者を持つてた催しだつたのだから、一ヶ月や二ヶ月遅れても書きばえがあると思ふ。

あの時、私が第一に感じたのは杉山先生の義太夫の爲めに殘し置かれたすばらしい力のあらはれであつた。第二に感じた事は、演藝會と私自身との間に、つながれた因縁の深さであつた。

杉山先生の力は誰れでも見とめてゐる。今の世の、誰れが死んだつて、あんなす

謹賀新年

竹本津太夫

謹賀新年

豊竹古勒太夫



ばらしい盛況は示し得まい。又、あのくらゐの事は當然であらねばならない。

一、二、三階のどこにも席がなく、漸く四階の素<sup>す</sup>てつペンにもぐり込み、遙か足の下で豆人形のやうな蠢めきで見臺にのび上つてゐる太夫たちを見下しながら、私はそれがとても愉快だつた。

「平山君、君なら少し判りさうだ。おれの義太夫の話を聞いておけ」

さう云つてある時杉山先生は、先生一流の義太夫所見を話された。十五六年も昔の事だ。

多少腑に落ちない議論もあつて、私は幾度か、憶面もなく、先生に反對論などをふりかざしてつつかかつた事もあつたが、兎に角、先生によつて私の義太夫智識は養はれたと云つて好い。

「おれに君の義太夫を聞かせろ、その代りおれも君に聞かせろ」

こんな事を云はれたのは十年ほど前だつたらう。冗談だと思つてゐたが、眞剣に日を定められ、むし暑い夏の一夜を、竹本素女さんの家の二階へ出かけてゆく事になつた。

先生は鶴澤司好さんの三味線、私は豊澤良造の三味線、そして先生の出し物は寺子屋で、私は櫻丸切腹だつた、而も、聴き手といふと誰れもゐない。先生の私を聴き、私のを先生が一人で聴くといふ始末、尤も、素女さんはあの大きな身體を固くして二段ともお相伴に聴いてゐられたが。

「へんな義太夫ですね」

杉山先生の義太夫を聴いた人は、きつとそんな風にいふ。尤も、素義の人たちの耳には、他人の義太夫は、絶體に悪く聴えるものらしい、だから、杉山先生ほどの義太夫だつて、素直に褒める人はなかくあるものでない。

おのれ一人堪納で、おのれ以外の人は皆んなへば義太夫と感ずるのが義太夫同好

謹賀新年

竹本鋳太夫

謹賀新年

鶴澤道八

者の通弊だ。だから、天狗といふ呼び名が素義全體の總稱となり、寢どこなんて落語も義太夫なればこそ、題材に用ひられるのだ。

「杉山先生の義太夫をはじめ聴きました」と、其の翌日、同好者に話したら、果して、せせら笑ひを顔中に泛べながら、

「へんな義太夫ですつてね」と、何人かの人が云つた。私は、その時、自分自身が嘲笑された氣持だつたので、以來、その事を人には話さなかつた。

何人の藝でも、上手下手で論じゐる事は不遜だ。どこからどこまでが上手の部で、どこからが下手だといふ標準は何でつける。まして點數をつけるなんて、如何にも便宜上とはいへ、沙汰の限りである。

藝は藝そのものが備へてゐる風格にあり、巧拙は藝をつとめる人の態度と人格にあるんだと私は思つてゐる。

如何に上手に語つても、語る人に氣品がなく、精神が亂れてゐたら、それはもう藝ではない。

私はそんな風にいつも杉山先生に教へられてゐた。義太夫節は芝居のすきうつしでもなく、口色のつかひわけでもなく、身振仕方話でもなく、勿論鼻唄でもない。

精神を語れ、精神を聴けと、杉山先生は云はれた。さらば、どうして精神が語れるかと、時折考へてゐたのだが、あの時の寺子屋は、私にはつきりと心構へを授けられた。

唄ふな語れ、語るな讀め。讀む中に律呂は生じ、人物は躍動し、精神は流れ出る、その間を、三絃の音律が、しづかに溶かしてゆくので、渾然たる藝術が構成される。それでこそ、はじめて、見臺の前に太夫なく、太夫の前に見臺なく、只曲中の人物のみが躍動するのだ。

見臺の前に太夫なく、太夫の前に見臺なく、只曲中の人物のみが躍動するのだ。

謹		賀		新		年	
丸ノ内		大和田		御園會は 有樂町スキヤ橋内 御満足は 御入浴 電話(一)二〇四番 割蒸美味 隨意 銀座(一)七五二番 御調進		麻布永坂	
鰻界の權威		更科本店		電話青山五六九二番		汁粉店	
人形町		梅その本店		電話浪花八〇〇番		蠣殻町二ノ一五	

唄ふな語れ、語るな讀め。

俳聖正岡子規は、繪をかく精神として、如何に旨く拙くといふ事よりも、出来る限り描かないで繪を大成せよと云つた。書に名筆犬養毅は、筆で手習ひをしたつて上手にはなれない、つとめて多く文字を見て、文字を腹の底に消化しろといつた。

劍聖宮本武蔵は、一寸斬らして二寸斬れと云つた。同じく山岡の所謂劍禪一如の言葉は、義太夫ばかりでなく、あらゆる藝術に共通した精神である。杉山先生の寺子屋を聞きながら、私はそんな事を痛感してゐた。

「けふはおかげで面白かつた。この會は又やらう、年に二回ぐらゐやつても好いのう、君さへよければ月一回でも好い」

終つてから杉山先生は、全身の汗を拭かせながら、便々たる腹を叩いて、満面に笑ひを見せてゐられたが、

到頭折がなくて、只一回で終つて了つた。義太夫に對して野心を持つた人は澤山あるが、杉山先生のやうな熱意を持つた人は又とあるまい。

語つて聞かせたがる人や、語つて見せたがる人、獨りでよがつてゐる人、えらがる人、そんな心構へで義太夫をおもちやにする人たちの耳に、杉山先生の義太夫がへんなものに聞こえるのは當り前である。

私は前に藝は人格のあらはれであると云つた。歌舞伎座に於ける女流大會の時、痛切にそれを感じたのだ。

私が入つた時、掛合の貞阿上人物語が濟み、竹本佳照が丁度よしだやにかからうとしてゐるところであつた。

竹本佳照は明治三十六年に、二代目綾之助と稱して薬師の宮松に初上りの看版を上げた人である、あの頃、私は義太夫が好きになりかけた頃で、先輩の同好者にさそれはながら、そこここと東京中の寄席をめぐつた。

謹 賀 新 年

上州梨木鑛泉

梨 木 館

上州黒保根村

箱根強羅溫泉

茶代 廢止 觀光旅館

電話(長)一六〇番  
宮ノ下(短)一三一番

伊香保温泉

横手旅館

電話(八)七五番

女では、小清、小政、素行、巴豚、大吉、愛子、京子、友之助等々の人たちが定運を喜ばせ、更に、昇之助昇菊の姉妹が満都の人氣を風靡した時分であつた。

男では、澁いところで綾瀬太夫、柳適太夫、長子太夫、人氣ものでは朝太夫、松太郎、そこへ竹本伊達太夫があらはれて、派手競つてゐた。

私はどうしたわけか、伊達太夫と二代目綾之助を變り目毎に聞きのがさなかつた。學期試験の最中に伊達太夫が川竹亭へ來たので、一日も缺かさず通ひつめたのに、あぶなく落第しさうになつたり、丁度月末の無一文の時に綾之助が近所へかかつたので、羽織の紐とよれ／＼の帯を質屋へ持つてゆき、二十錢借りて聴きに行つた事もあつた。

それほど好きだつた人の一人、二代目綾之助と始めて對面したのは丁度震災前だつたと思ふ。私の友人が女房をもらつた、その婚禮に立會つて、花嫁の素性を聞くと、二代目綾之助さんの娘だといふ。これは／＼とばかり、昔を語つて、以來懇意にしてゐるし、佳照と名乗る前の名柳司といふ文字をえらぶ時は、たしか私が相談にあづかつたと思ふ。

現に、今聞かうとしてゐる吉田屋などは、私の家で、その頃何遍か聴かしてもらつた事がある。

佳照の次に出たのは竹本越駒である。この人と知合つたのは震災前だと思ふ。都新聞につとめてゐる頃、私が毎日辨當をつかつてゐた洋食屋の主人が、私に引合はしてくれたのだ。その時分、相當外の演藝鑑賞に忙がしかつたので、義太夫に對してはぼつぼつ遠ざかりかけてゐた私だつたが、その中で越駒は尤も屢々聽いて、語りくせが耳に残つてゐる。

竹本東朝は震災直後であつた。故人水谷竹紫によつて紹介され、神樂坂の演藝館と、麻布森元の寄席とで聞いたのがはじめだつた。聲量と、音律の上に、天稟を備へ

### 謹賀新年

氏事 扶桑教權大教正  
刑事 前判事

商許事件 辯護士 飛石久太郎  
迅速懇切 俳號 かなめ  
に取扱ふ

東京市牛込區東五軒町五四  
市電東五軒町停留場際  
電話牛込6574七番

### 謹賀新年

ハカマの天狗

見臺と肩衣

日本橋區人形町通り

濱口本店

(秋華)

支店 電話茅場町二六三五番  
振替東京三三三四番  
工場 横濱市吉田町一ノ九  
日本橋區松島町三四

た人だと感じて、あの時は心ゆくばかり聞いたし、東朝の後援者とも逢つて、特に目をかけるやう頼まれた事もあつた。東朝の絃をつとめる三平は都新聞社の同人が殊に肩を入れてゐたので、これ亦、よくその絃になじんでゐる。

會主の素女は、云ふまでもなく、杉山先生の身邊に始終添つてゐた人なので、この人にもなじみがある。

當數六番の中、五人までも相識ること數十年、殊に、私の職業柄、その私生活の大部分を知つて、その高座を聞いてゐると、一人として、藝はその人の内面のあらはれであるといふ氣持を裏切る人はない。

あまりにも義理固いために、中途で十餘年も高座を退いてゐた佳照は高座の上にもそれが氣兼ねとなつてあらはれてゐる。獨りでつとめた吉田屋は美しく、精練な藝であつたが、掛合の勸進帳に富樫をつとめると春駒の辨慶にムザなあほられ方をしてつた。

世にもやさしい氣性を持つたために、これも中途で退かされてゐたらしい東朝は、立派な天稟を持ちながら熱に於て奔放さが足りない。

その糸をつとめる三平は、正反對に、あまり奔放な氣象のために、早老の氣味を見せた弱さがちらつてゐる。

藝の上に一本氣の強い氣性を持って終始した越駒の今の高座は、正に完成に近いものがあり、溢れる如き熱を見せてゐた。素女に到つては、追かに杉山先生を精神を受け、丹練に鍛へられ、糸亂れぬ高座ではあるが、それだけに、杉山先生の強つ氣に聊か壓せられた氣味がある。いぢけてはゐないが、簡性を伸ばし得なかつたといふ恨みがある。かうして數へて上げれば、畢竟藝はその人のあらはれであるといふ事が證據だてられる事はいふまでもないが、さてもく、私自身と演藝界との因縁の深さが今更ながら思ひ知られて、人知れぬ感慨に咽んだことである。

謹

淺草音女會

(イロハ順)

新

米惠比家富	浪花家か	中川家仲	福叶家小	新春菊の家綾	光榮綾	高本喜	竹本志	同本志	新豊の家昇	若松家松	信惠比壽富	幹日の家八	事日の家八	相福助長谷川文久	役談吉本平井
千	き	ま	ち	春	榮	葉	吉	春	助	治	之	重	吉	久	榮
代	つ	勇	ち	春	榮	葉	吉	春	助	治	之	重	吉	久	榮

賀

年

義

太

夫

雜

話

齋 藤 拳 三

甚だ私事にわたつて申譯ないが、昨冬富取氏から杉山其日庵氏追偲の素女會におさそい下さいましたのに病氣の爲御斷りいたしました。田中煙亭氏からも同じく「豊澤會」及び「東都五十義會」へ御さそい下さいましたのと同じく病氣の爲不參りました。私の勉強を指導して下さいさる兩氏に御禮の意味で此の雜稿を書きます。本誌の讀者諸先輩に讀んで頂けるかどうかを不安に思いながら。

### 蓄財家の松葉や廣助

現今三味線の手と云へば團平と先々代の廣助と大体二系統である。其れ程此の二人は斯界の巨星であつた、團平は幾多の佳話を残して居る、其の義太夫への愛の深さには全く驚くが、一方の廣助はどんな人だつたのだらふ。

廣助は死後其の遺産は七十萬圓と云はれて居る、其の妻女は松葉やと云ふお茶屋の娘で夫の出演して居る文樂へは一生に一度きりいつた事はないそうだ。夫の出演時間中は

常に神前に燈明を上げて一心に夫の出來ばえのよい事を祈つた、決して横になる様な事はなかつた。妻として夫の出演中を客席から見るとは失禮であるとの意見からである。此の良妻の内助功も多のかつたらふが廣助自身が非常な蓄財家だつた。紋下になつても決して車で樂屋入りなどはしなかつた。伊達太夫など車上からトボ／＼歩いて居る廣助に出逢つて平公した層だ、三味線やへ小金を貸して貸しのカタに三味線を押し附けられると其れが亦高價に賣れたものだ。弾き人がいゝのでよく鳴る三味線と思つて且那衆が買ふのである。糸なども三年位使へる程枯らして置いた、地方巡業などへ行くと下の者に仲々給金を渡さなかつた、即ち親から大切な若い者を預つて來て何程か金を残して歸らなければ申譯がないと云ふのである。

或る時若い三味線の吉郎が白石嘶の端場が附いたので松葉やへ教りにいつた、すると廣助は「忘れてしまつた」と云つて何としても教へてくれない、吉郎の父の新靱太夫が

これを聞いて「これは私が気が附かなかつた、松葉やへ行くなら何か持たせてやらなくてはいけない」と云つて玉子二十個を吉郎に持たせてやつた、廣助は非常に喜んですぐ「思い出した」と云つて教へてくれたさうだ。

玉子二十個ですぐ思いだす所は無邪氣である。

### 饅頭娘の間違ひの理由

伊賀越双六の政右工門屋敷の段に「老人の寸志、そと、御覽下され」と云ふ宇佐美五右工門の言葉がある。これを東京に現存する某大家は「老人の寸志ぞ、トツ御覽下され」と教へた、其お弟子さんは何の氣もなくそれを語つて居たので此れを聞いた某氏が訂正してやつた、私の聞いた古藪、大隅、故源大夫、皆無論そんな馬鹿な事は云はない。所で某大家が間違つた原因は今に不思議の一つだつたが、最近私の友人の矢野氏が其の原因を發見した、同氏は床本を書くのが上手だ、で氏の説に寄ると「寸志」の「志」の二つの點が下の「そ」の字上の場所を違へて打たれたので「寸志ぞ」となつたのださうだ。

高瀬操氏はよく拙宅へ見へた時代此の一段の研究者であつた。私は此の一笑話を氏に讀で頂きたいと思ふ。

### 三代目團平と富助の將棋

先年私どもへボ將棋連が大崎八段と樺呂木七段を招聘して將棋の會をやつた、野澤金造は角落ちで樺呂木七段を負かした、金造と同格の長谷川と云ふすし屋の主人が大崎八

段と勝負無しだつた、其れ程の金造はアマチュアー將棋の大家である。

三代目團平は將棋好きだつた。先年金造が八王子で會を演る時應援を頼んだ、すると團平は將棋を指してくれば金はいらないと云つたさうだ、開演中の三日間金造は團平の旅宿へいつて將棋の相手をしどをしで暮した、角落ちで樂々勝てる所を一對二位に指してやるのである。團平の妙技は故大隅と共にレコードに「堀川」と「壺坂」と「七段目」が残つて居る。

一寸チャリのように軽く弾くやり方でよく聴くと仲々妙味がある。欲のない三味線である。

富助は團平よりも少し將棋は弱かつたが亦團平に劣らぬ將棋好だつた。新富町の稽古場でやはり角落ちで三番に一番位負けてやると非常に喜んで稽古をしてくれたさうだ、只將棋を始めると稽古の人を待たせても平氣で困つた、此の富助は一度聽いたら必ず忘れないで地極耳だつた、大團平と松葉や廣助の間を往來して使奴をした人だけに兩大家の弾き方を何でも知つて居た、稽古のやかましいのも一通ではなかつた。女の賣人など昨日稽古した所を忘れて、しかられるのがこはさに金造の所に聞きに來た。其の爲カラ下戸の金造は菓子と糸には困らなかつたとの事である。

私は團平と富助の善良さと金造の勉強心に敬意を表するものである、當時金造は岡大夫を弾き薩摩大夫を弾いてる身分で富助の所へ稽古に行くのを仲間から笑はれたものだ。

落語の「猫久」の文句ではないが「笑ふ貴様がおかしいぞ」と云ひたい、義太夫に黨派心は禁物である。

# 素義風流線

スキイを語る

智將 安藤どくろ氏



◇：素義界一方の雄、仕事にかけても亦、淨瑠璃に於ても華々しいいき方の智將安藤どくろ氏。趣味の深さ、廣さに於ても亦、何人にも譲らぬ素晴らしい造詣の所有者で、折柄の寒さに氏は火鉢を手にかざし乍ら、靜にスキイを語られたのである。

◇：一昨年北海道無意根山へ行つた時は、危く遭難されさうになつたそうだが、今年もこの山を目指して行かれたといふ。

◇：十勝からルフレ山、歸途は洞爺湖に立寄つて、この附近に遊ばれたのだが、舊火山に出来た湖水で、エソ富士がこれに映じて、素晴らしい風景、夏は大勢人も行くが、こゝは冬の眺望が絶佳で、冬の景色こそ觀賞すべきだとのこと。

◇：去年も北海道から樺太方面でその足跡を延ばされたが、今年で恰度三年續くわけである。

◇：北海道の方は雪の質がいゝさうで、赤倉でも上越の石打、湯澤あたりでもスキイ場はいくらでもあるが、朝夕凍て、日中は水分を帯びるので雪の質が悪いさうである。

◇：奥日光はまた北海道に似てゐて、粉雪で質はいゝ方だが、信州の桐ヶ峰、菅平等も内地としては良質の方で、雪の景色はいづれも雄大で、男の精神を養ふには最もいゝ場所だといはれる。第一、雪のある處凡てが道で、道としての範圍はこれ程廣大なるものは無く、實に壯快そのものゝやうだとのこと。

◇：スキイの技術は實に至難なもので、コリントやアイスケイトその他これに類した運動はまだ短調だが、スキイはいろ／＼な型もあれば、また技術も複雑で、奥行が深い。

◇：夏の登山は一步一步であるが、スキイは傾斜面の自然な山を登るのだから、夏以上の面白さで、見渡す限り純白な中を、朝目の色彩が刻々に變化してゆく光景は、とても筆紙に盡し難いといふ。なにしろ十時間登山すれば、下りは二時間位で、下りるのだからそ

の速力、その一瀉千里の豪快味は、實に言論に現し得ないさうである。

◇：日本でスキイの發生地は、高田聯隊が第一で、妙高山麓赤倉の發展はこゝにある。

◇：その盛んなことは實に驚くべきものでスキイの臨時列車を出しても、全部満員といふ有様で、二列車を出す位の流行。

◇：北海道では、氏は多くの寫眞を撮られたが寒さの爲にシヤツターが利かないといふ有様で、いかに酷い寒さであるかは解らう。

◇：かうして氏はあの壯大なるスキイを夢見るやうな面ざして、靜かにスキイを語られたのである。

◇：そして、さうした新しい運動に深い趣味と研究とを持ち乍ら、一面南畫を愛し、書は賴山陽を最も愛されてゐる。高輪の靜寂な屋敷町、こゝどくろ氏のお部屋の床には、令夫人の手活けの水盤が置かれ、節齋の竹の軸が奥床しく掛られてゐる。新しくそして古風な氏の二面を物語つてゐる。

◇：令嬢も亦趣味の方で、通學の傍ら、舞踊は花柳徳次郎に、琴曲は宮城道雄の兩師に師事され、日本趣味横溢の御家庭である。

◇：けふもどくろ氏は、なにを思はれてゐるか。心はあの壯嚴雄大なスキイ場の雪景色であらう。

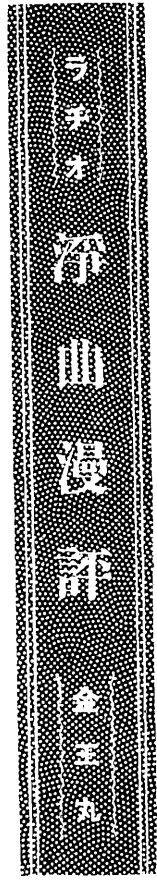


# 迎春所感

寶藏寺天昇

本年は甲子の年に出て干支の始りて例年より何となく更つた爾忠實の歳のやうな氣が致します。皇室の彌榮え躍進日本の新春に應はしい日本晴れが続いて氣も晴々として何となく我が義太夫界も本年は秩序立つて、向上の復活の緒に就いた感じがして御同慶に耐へない次第であります。玄人即ち技藝部員は其の本分を充分に盡し、素義は素義の本分を發揮し、大衆的精神に立脚して斯道の發展に邁進すべく、私も出来る丈けベストを盡して、巴津天會や大東京素義聯盟審査會の機關を大いに利用し、大いに意義あらしめ、斯道のために貢獻するつもりであります。

只希ば利己的の信主義——換言すれば人の道を踏まずして自己の名利の爲めのみ種々手段方策を弄する現金主義の人は、我が義太夫界から一人だに



關西素義 (十二月廿二日)

昨秋大阪南地演舞場で催された大日本素人淨瑠璃第一回競演會入選者の中から、先づ三名が選ばれて放送といふ事になつたもの、今回は今春行はれるといふ。

(第一) 一谷嫩軍記 陣屋の段

藤原明石 絃 豊澤濱右衛門

大會で西の大關に据つた人、種を洗ふと此人、元と素義でなく、太夫を志して鍛太夫の門に出たのだが、中途、業を轉じて今の新聞販賣をやるやうになつたとの事。その堂々たるもの故ありといふべきか。『時刻移ると次郎直實』から語り出して『泣く音血を吐く』まで。首實檢で『寄るもよられぬ』あたり結構『實檢まし〜』なども、落付充分と申すべし。唯だ、我等の耳には、相模の詞が、いや、その音聲にいやな處があつて、困つたといふ

事を附加へておく。

(第二) 觀音靈驗記 澤市内の段

吾孫子 櫓 絃 豊澤龍助

明治三十八年からの稽古といふから、もう三十年もやつてゐる人、今度の大會では西の關脇になつたとか、頗る美聲で、成るほど壺坂でも得意にださうといふ人らしい。第一、寫真で見ると好い男だ。『夢が浮世か』から、お里の『口説き立てたる貞節の涙の色』まで、ちよつと飛んで『澤市涙で暮れながら』から『御寺をさして』までを二十分に、遺憾のない出来榮だつたが、マイクの前に時間の制限からかやゝ急行の感があつた。

(第三) 極彩色娘扇 天王寺村の段

椿原喜幸 絃 野澤喜市

大會で東の大關の地位を獲得して、文部大

影を没する事を希望いたします。

然して義的精神であり、人情本意に立つて協力努力する事は、義太夫界の向上發展の爲に最も必要と思ひます。

我々素義は、趣味娯樂として、斯道を愛し、之を賞讃して居る者であるから、和氣霽々と對社會的に一般民衆の模範となる事が出来得れば、本當の義太夫精神の眞隨に徴するものだと思つてます。

義太夫を娯樂趣味とするのみならず同時に精神の練磨が大切であります。精神修養なくして眞の義太夫を語る事は出来ないと思ひます。或る全一段を通して申ますと、全面的の背景の説明と更に作の本筋を強く活かすといふ事は、登場人物の表現即ち情操であります。其の情操は登場人物の各個人々々の立場又は心理を深く解剖して微細な點まで其の心理を研究して語つてこそ眞の義太夫を語る事になるが、それを語る人の人格は常に立派でなくしては

臣の優勝旗を保持する光榮を擔ふの人。殊には語りものも、誰れもがザラに持出し得ぬ凝つたもの、盲兵助である。我等も東京素義あたりでは聴いた事もない品物、歌舞伎では幼少の頃、純帳芝居で、上方の實川正若といふ人の兵助に、後に吉兵衛となつて死んだ中村蝶昇の朝比奈藤兵衛で一度見た記憶があり、其後、帝劇華やかなりし頃、今の延若が初出演のお目見得に出したのを見た、其時の朝比奈は幸四郎であつた。それ以來歌舞伎にも殆んど出ない珍らしいものである。喜幸さんはその兵助を最も得意の語り物として、各所に持出してゐるらしく、成るほど拜聴した處によると『無残やな兵助は』から『こけつまるびつ』の引込みまで、充分に鍛練された技巧の妙、殊に、小判が出ての驚きから『筆松、表しめて来い』など、巧いものであつた。數はなくとも、充分に聴かせ得るもの一つでも二つでも持つて居るその人に敬意を表する。

大阪女義 (十二月廿七日)

双蝶々曲輪日記 II 引窓の段 II

彈語り 竹本小仙

『橋本』は滅多に出ないが『引窓』は此の頃

男女素玄の人々によつて、度々聴かされる。金丸丸大好きの曲の一つである。度々出るといへば、此の太夫小仙さんも、實にBKから度々現はれる局寶の語り手である。技藝は既に定評もあり、當日の出来榮えも亦た、一點批難の點も見出されぬものであつた。約四分の彈語りに少しのタルミも見せぬ努力と修練とには感服の外はない。更らに我等は、誰れか適當な相三味線を以て、痛ましいときへ感じられる彈語りを止めて貰いたいと思つたは間違ひか、但しは彈語りの方が、やつぱり氣が揃つて好いのであらうか。

文樂若手 (一月一日)

一、相生松  
二、花競四季壽

竹本相生太夫  
豊竹つばめ太夫  
竹本小春太夫  
竹本源路太夫  
鶴澤友次郎  
絃  
豊澤仙糸  
野澤勝平  
鶴澤友造

ならない——何となれば、其の人の人格が一段に如實に反映するからであります。

其の語り口を見て其の人の人格を或る程度迄批判が出来ると思はれます。

人間として、長所もあるかはりに短所も亦誰しも持つて居りますから、其の長所をのみ活かして、短所を補はない時は缺陷ある人格となります。其の短所を出来るだけ少なくせんと慾する處に精神の修養があります。神佛に非ざる罰な人間が、如何に偉振つても、如何に修養したと雖も、矢張り汝の名は人間であります。然し、人として此の世に生をうけたならば人間らしく、世を送りたいと私はたへず考へて居ります。

人に鞏固されず迷惑はかけず自己の力に依つて各人が、自立自營する事が出来れば、延いては我家が自立自營といふ事になります。各々分相應出来る範圍に於て、精神的義太夫道に貢獻す

丙子元旦の晝間演藝の中に組まれた、お祝儀物である。共に文樂座三絃の紋下鶴澤友次郎師の家の藝であり、又たその作曲になるものであつて、文樂座若手中堅の人々によつてカケ合に、尙ほ望月太津吉社中の囃子入りで放送された。御祝儀物であり、景事ものであり、とかくの批評もないが、前者は相生太夫をタテに、後者はつばめ太夫がタテを承はつてゐたやうであつた。賑やかにめでたく、機嫌よく發聲されてゐた。

東京女義 (一月三日)

近頃河原之達引 堀川の段

竹本素女  
ツレ彈 竹本素衛門

永く寄席稼ぎもせず、東都女義太夫の第一人者を以て任じてゐる竹本素女さんである。客冬の如き、生前知遇を忝なうしてゐた杉山其日庵主人の追善を名として、日本一の大劇場、木挽町の歌舞伎座を満員にした豪勢を示した竹本素女さんである。昭和十一年東京側の傍頭の放送を承はつた素女さんは、得意の『堀川』であるが『頃しも師走十五夜の』と

傳兵衛の出から語られる。役々確かな出来といふ事が出来やう。猿廻しの三味線も、一二ヶ所、躑ぎがあつたやうだが、違者なものである。

東西女義 (一月九日)

一、袖萩祭文 竹本越駒  
絃 鶴澤紋教  
二、白石揚屋 絃 豊竹猿司  
絃 豊澤仙玉  
三、朝顔大井川 絃 竹本雛昇  
絃 豊澤小住  
四、酒屋 絃 豊竹呂之助  
絃 豊澤新造

一、二は東京即ちAK。三、四は大阪即ちBK。競演とある。袖萩は『謙杖はかく共知らず』から祭文まで、揚屋は、しのぶをぬいて宮城野の例のさはりから『貰ひ泣してたてわけの』まで、第三は宿屋の『深雪は何か氣にかゝり』から大井川のくどきまで、酒屋はほんとうに『さはりの夕』で『後には園が』から『猶いや』までといふ語り方、それを書しても、どれを取り上げて、といふ次第で

る事は、斯道の向上發展のために重大なる根本基礎をなすものであります。

形式よりも、精神であると思ひ思ひますが、不言實行か、言行一致が、人として大切な事と思ひます。身に及ばざる企劃又は望外の望を起し、それが私心を根本としたものならば到底初期の目的を貫徹し、立派な實を結ぶ事は出来ないでせう。物事には軌道あり、順應あり何等確信の持てる計劃なく風吹く儘に漂浪の難路を續ける時は見苦しい人間としての汚點を暴露します。世の中は嘘色では一時世人を瞞着する事は出来るが是は益少にして、過大な結果となる事例は多々あります。

然らば私の思ふ結論は、眞の一字であります。是は昔から今に到る迄只一字の眞がなか／＼言ふに易く、行ひ難き人間一生を通じて一番征服し難い恐るべき金城鐵壁だと思ひます。本年は我が義太夫界が躍進復活すべき大切な過渡期であると思ひます。

希ば子年に因み大いに忠實に業務に精勵し何卒素直協力して斯界のために盡瘁せられん事を衷心から切望して己まなない次第であります。

批評はおあづかりを利巧とする。大阪の呂之助さんは例の名人？呂昇の養女になつて、名を襲がうとした、あの呂之助さんで久し振りに美音に接したが、酒屋のさきはりを恐ろしく引延ばし、お時間一ばいにしたなどは、B Kのお好みかと、眉を顰めた。

#### 淡路人形 [二月十四日]

奥州秀衡有髮花婿 〓秀衡館の段〓

竹本島之助

絃 豊 澤 町 廣

これは又、珍らしいものをBKでは聴かせて呉れた。淡路人形淨りりの、今猶ほ餘喘を保つて保存されてゐる事は、少しく淨曲に關心を有つものゝ、知つてゐる所であり、一二年前には、一度東京へも見せに來たものであつたが、聞く所によると、今度放送された市村六之丞座は、二三残つてゐる同人形淨りりの主なるものであり、放送者竹本島之助さんは、その文樂なぞでいふ所謂紋下、即ち本太夫と稱する人であるといふ事で、そして、その語り物も、藝題の八字並べてあるのから珍らしく、内容は、ちよつと御所三の辨慶上使

に市若初陣を一緒にしたやうな大悲劇で、節附も殆んど、その末段の如き御所三そっくりのやうであつた。三味線の豊澤町廣さんも、若いに似合はず、頗る達者で、唯だ時に、變な入れ撥をするのは、淡路上りの特色かとも思はれた。島之助さんは、音量も堂々と、一二、三とも確かな聲の持主で、節廻しも、自から名乗る荒削りでもなく、素朴でもなく、普通義太夫節の各節を取入れてあるものであつて、結構な一段を聴き泌ませた。末段に至つて、稍や聲につかれを見せたのは、マイク慣れぬ爲め、最初に力を入れ過ぎた爲かともおもふ。

#### 喪中ニ付キ年賀缺禮

田 口 司 重



## 浄曲雜考

綿貫六助

あけましておめでたうございます。

さて、富取さんから、何か一席演れとの御命令で御座いますので、暫時お耳拜借と出掛けました。

### 人格は藝術の基礎

知れ切つた事でゐて、なか／＼識れておりませんが、この問題です。

『おれののどに百萬圓ももつてゐる美人が引ツかゝらないかなあ。』

など、愚考するお方は、わが淨らかなる淨曲界には斷じてないのでございますが、萬一かういふ邪道雜慾に類した念慮が毫頭でもありますと、藝は上達どころか、奈落の底へ陥落してしまひます。

例を、文藝界にとつて觀察しますと、現今の文藝が墮落しましたのは、文士の自駄落からきてゐるのでございます。

何事ぞ文書く人の株相場

何事ぞ文士のばくち競馬事

かぞへればきりもありませんが、目下の日本文士で、露西亞のトルストイの前に出て頭のがるお方は一人もゐないと斷言します。

なぜでせう？むりに上らないようにしてゐるのです。株相場競馬博打はまだ良い方で、酷いになると、野性を發揮して女を次々と廢物にして欣然として、それをネタに喰撃いでゐる破廉恥漢などもありまして、かういふのは、社會へ毒を蒔いてゐるものです。

かういふ人格から藝術の生れる筈はありません。

トルストイなどは、散歩する時間さへなかつた偉人です。人それ自體が終生を通じての大藝術でありました。

義太夫も、語る人の態度によつて、立派な藝術といはれます。かの作品の内容に則りて、人格を高尚し、現世にとふ處

あれば、おしもおされもせぬ藝術なのであります。

これも文藝同様に、淨曲の内容はいゝのですが、人の精神次第で遊藝、いや、それ以下の魔性の悪戯と早變り致します。

慎むべきは、人格であります。人格が藝の基礎なのであります。

義太夫で女釣るとは大義なり

### 近來實見した素義界の吉兆

酒を止めて義太夫を語るといふお方がみえました。

あらゆる道樂を斷念して義太夫に打込む紳士がありました。

義太夫を語るが故に、我工場で窮行率先、多くの人の面倒をみて、親切だから、工場はめきよくなる工場主がありました。

數へあげればきりもありませんが、誠に、その方の爲には勿論、國家の爲にも、はた、斯道の爲にも欣ぶべき事とおもひます。

また、素義の語りくちが、漸次に本格的になるのはうれしい事です。

娛樂、衛生、隱居慰み、等々、皆結構ですが、演る以上は本格にやりませんと、義太夫の内容も、先人も、斯界の大家もなくせう。

以前、私は、指導精神といふ字を以て、寶藏寺さんや松鶴さんなどを評しましたが、オケサや都々逸ならばいざ知らず義太夫の内容に對しても、娛樂にやるなど、大言できる安易安値なものではございません。

必死にやつて始めて、衛生にも娛樂にもなるので、低調な了簡では、ともすれば文藝の如く墮落の底に沈倫するに至らぬと限りませんから、御用心を願ひ上げます。

### 義太夫の過去と將來

現下、日本を世界の二三番の位置に押し上げたのは何でせう。勿論、大和魂です。その大和魂は何で繼承されたのかといへば、義を重んずるところの義太夫が與つて力あるのです。反對、に過去に於て我が淨曲が目下の腐敗文學のやうなものでありましたなら、日本はとうの昔に、ムツソリニ坊あたりに征服されてゐたでせう。寒いのに身の毛がよだつではありませんか。

それ故に、日本は擧つて、この義太夫精神を呼び醒まし、益々、大和民族特有の精神力を發揮せねばなりません。

それには、義太夫を流行させ、享樂させ、理解させ、そして、我思想界を建設しなほさねばなりません。指導精神と申しましたのはこゝなのです。

目下混沌沈滞の思想界に對して、義太夫を語るお方は、我國內患を除去するところの志士なのです。かういふ御氣分で

お語りになれば、上達受合です。

たゞ困難なのは、なかく難かしいので、おぼえるのが大變です。大骨折なるが故に、貴重なのでもありますが、西洋あたりの下品なストコードツコイのヂヤズなどの氾濫に、青年などを無下に輕薄に陥らしめぬ爲には、國家でこの淨曲を充分に保存の實をあげて保護し、教育し、流布させるべきものと確信します。

この意味で、義太夫や浪曲の放送は至極結構な事とおもひます。

皆様は、百も承知の事でせうが、わが義太夫のどの段をもつてきても、私の申上げます、この指導精神的な大義の盛つてないものではありません。

従つて、義太夫をよく語る事は、この精神を發揮する事であり、この精神を放射する事であり、わが五里霧中に迷ふ民衆を指導する事でござんす。

娯樂で始めても、娯樂などいふ低調な文字で片付けらるべき事件ではないのです。堂に入るに従ひ、その志士的指導精神が益々激烈になるでせう。妙味はこゝに存するのです。

それから、將來は、義太夫研究家といふものも出てよいのです、否必要です、安藤都昇君（都太夫子息）などは適任でせう。

要するに、將來、國家をも、個人をも興隆させるのが、わが大日本帝國の義太夫です。零落、墮落は淨曲の大道ではご

ざんせん。

## 更に義太夫の將來

國家で充分保護し、個人の營利に委せず指導する必要があるのは、この義太夫です。それが爲に二三年此方、種々な會ができて結構ですが、富裕者の娯樂に止まつてゐたのではまだしようがありません。

無暗に物の統制などを叫び空らすよりは、よき樂しみを與へるが上分別です。

文藝界ではペンクラブなんて西洋語の會ができて、文藝を世界に賣出すさうですが、今の處賣品乏しく困るでせう。がらに似合はず毛唐の眞似した小説を毛唐に賣るなんて、悲慘滑稽ではありませんか。

義太夫稽古でもさうですが、何でも萬事、我的特質を發揮したものでないと完成も販賣もあつたものぢやござんせん。我特質は大和魂です、その表現は義太夫です、義太夫なら、ペンクラブなくとも、もう估れてゐます。毛唐が袴をつけて義太夫を喰るやうになれば、世界平和などお茶の子でせう。

せひ、さう仕りたいのです。

それにしても、小技巧や小細工などでコトするには、あまりに偉大なわが大和民族の藝術は義太夫です。

轉向者たちも皆一丸になつて、此義太夫的日本精神を振翳して、世界の猛獸に反逆するやう、内閣のお爺さん達へも、彼等の指導を齎り立てましたが、元來、口無調法故お氣にとんだ失禮を齎り立てましたが、

おめでたうございます。本年も相かはらずお引立てを希上げます。めでたしく。

自昭和三年度 至同年 本社工催義太夫會出演諸氏芳名錄 (九年度よりは別表) (出演順)

柳澤 吾鈴	<b>三年度(素)</b>																					
	吉田 三芳	宮崎 其柳	栗原 千鶴	星野 桔梗	中澤 巴	矢富 靱	高野 昇	加藤 二樂	谷口 響阿彌	杉山 巴仙	三井 篁鳳	猪谷 銀水	和田 春和	鈴木 一春	長谷川 文久	鈴木 一信						
	三ツ木 美登利	吉田 三芳	栗原 千鶴	杉山 巴仙	山崎 力	安部 富士登	黒川 叶	高野 昇	廣澤 一志	秋山 初音	森 市菊	竹内 とをる	永井 永樂	堀 ときわ	湯原 清司	松島 松樂	笠原 清芳	神馬 里芳	櫛 義樂	中村 小六	高野 喜代子	
	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	<b>五年度(素)</b>																					
中田 金壽	飯田 五聲	山崎 悦子	關 清芳	笠原 清雀	秋本 雲雀	紺 我笑	安藤 どころ	櫻井 登帳	須賀 一鳳	星野 桔梗	宮島 和紅	加藤 二樂	高橋 高昇	只石 義澄	只石 義澄	津田 十六	宮島 和紅	太田 二風				
一	一	一	一	三	一	一	四	一	二	二	二	一	二	三	一	一	一	一				
竹内 とをる	福田 三幸	寺岡 喜樂	奥村 冠之	本城 長平	保々 長平	細川 春和	和田 春和	松島 松樂	平井 榮	島田 天賞	栗原 千鶴	玉井 松樂	湯原 清司	宮本 武藏	鈴木 語幸	松岡 語松	中澤 巴仙	杉山 巴仙	吉田 三芳	青山 翠谷		
一	一	一	三	一	一	一	一	一	二	一	二	三	二	二	一	一	三	三	一	一		
近江 清華	猪谷 銀水	淺原 正朝	直井 雛司	笠松 松蝶	鈴木 松寶	保々 長平	竹内 とをる	竹内 たもつ	湯原 清司	木村 一樂	安藤 どころ	寺岡 三幸	須賀 一鳳	只石 義澄	鈴木 松寶	大樂 葵	竹内 たもつ	鈴木 和樂				
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二	三	一	一	一	一	一	一				
竹内 とをる	湯原 清司	榎本 清福	河野 國聲	小鹽 潮	大用 大嘉津	菊地 秋月	只石 義澄	<b>七年度(素)</b>														
三	三	三	二	一	三	三	二	安藤 どころ	保々 長平	鈴木 松寶	寺岡 三幸	玉井 松樂	菊地 秋月	榎本 清福	宮本 武藏	水野 昇	<b>同 (身振入)</b>					
三	三	三	二	一	三	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一				



杉山	直井	栗原	榎本	大塚	大築	飯田	水野	梅本	吉田	寺岡	鈴木	高品	笠原	鈴木	渡會	松岡	廣瀬	瀧脇	中澤	鈴木	緒方	吉川
語樂	雉司	千鶴	清福	三鳳	葵	五聲	昇	香伯	三芳	三幸	松寶	一重	清芳	語幸	うつば	語松	いろは	まつば	巴	和樂	千晴	浪補

一一二一一一一一一一三三四一一一三三三

中道	橋本	片山	藤卷	青山	中野	近藤	須賀	加藤	松岡	福田	金森	田中	水戸	佐藤	座古	猪谷	足田	保々	竹内	小倉	玉井	神馬
素鶴	登	つばめ	三雄	翠谷	吳羽	すみれ	一鳳	福勝	茂里雄	田都	玉聲	燈亭	部壽	文司	吉山	銀水	八重壽	長下	たもつ	東華	松樂	里芳

細川	原田	鈴木	寺岡	大用	保々	廣瀬	竹内	湯原	渡會	榎本	島田	同	秋山	桑原	川奈	田口	木下	岩田	中内	櫻井	島田	小林	箕浦
清巴	越三	松寶	嘉幸	嘉津	長平	いろは	たもつ	清司	うつば	清福	天賞	(身振入)	ゆたか	美峰	部銀	辰壽	松玉	未成	公玉	登帳	春子	隅斗	其甫

二三一一二七三三三五三九二五五六

平井	平野	平野	小野	福林	小田	水戸	青山	猪谷	西田	秋山	座古	松野	寶藏	須賀	瀧脇	大澤	緒方	櫻井	中野	松岡	菊地	吉川	玉井	只石	安藤	飯田
貞子	昇潮	ろ	潮	都	斗	壽	谷	水	可松	たか	吉田	○	天昇	一鳳	まつば	二喜	千晴	登帳	吳羽	語松	秋月	浪補	松樂	義澄	どくろ	五聲

二一一一一一一一一一一一一二二四二二二二一一三二二四二二

青山	川奈	須賀	菊地	米澤	只石	寶藏	伊藤	平井	宮崎	原田	高瀬	杉山	大用	秋山	岡崎	保々	松岡	水戸	小林	瀧脇	八年度	永瀬	川奈	田口	高瀬
翠谷	部銀	秋風	秋月	春樂	義澄	天昇	錦	榮	柳	越巴	操	語樂	嘉津	ゆたか	圓六	長平	語松	部壽	隅斗	まつば	身振入	永樂	部銀	辰壽	操

一三三一一一一一〇一四一一二四二二一三二二六一一三一一四

中野	勝田	小林	大金	神馬	島田	松井	箕浦	大澤	小暮	西田	岩田	河野	廣瀬	細川	井田	玉岡	松岡	金田	鈴木	井上	福田	高品	田口	福田	田中
羽雨	松和	大玉	里聲	天賞	靜鳳	其甫	喜	江	昭	成	未	國	は	清泉	樂松	松	金	語	幸	巽	柳	一重	辰壽	煙都	亭

一一一一一一一一一一二四一一一一一三四一一二二二

★★★  
師走の美談  
★★★

中 島 山 鳥

なにしろ忙しい年の暮で、入谷俱樂部で小  
米の納會のあつた時の事である。

寶藏寺天昇氏は、この頃になると、三ヶ所  
も掛け持ちの奮闘で、遅刻されたので、一番  
お仕舞ひに高座に上つて語り出し、恰度二三  
枚もいつた件で、聴衆が急にガヤ／＼と騒ぎ  
出した。

聴衆といふ聴衆が全部高座を見ずに、一様  
に別の途方もない方を見る。

つまり福引の抽籤番號が貼り出されたので  
ある。

天昇氏は、そのうちには止むだらうと、不  
愉快な氣持で、一行二行と語り進められたが  
中々止まないの、遂には義太夫を中止して  
立上り、

『忙しい中を義太夫を稽古して皆様に聞い  
て頂くのは並大抵の苦勞ではない。殊に高座  
へ上つて見臺に向つたら戰場も同様命がけで  
語る。こゝに愛義精神の尊い現れがある。な  
ればこそ聴く方も又一生懸命に聴いて貰ひた

い、辨當や福引をアテに來られるやうでは義  
太夫の發展も心細い。』  
と、聴衆に説得する。

水を打つた如くシンとした中に、『悪かつ  
たです。聴きますから續けて下さい』と、方  
々から聲があつたが、氏は氣分のものである  
からとて、席を蹴立て、樂屋へ下り、箱屋  
にも非常に立腹せられたが、直ぐ元に戻つ  
て、

『今後もある事故注意しなければならぬ』  
と、懇ろに説得してもう歸りかけられたが、二  
階の聴衆は一人も歸らず、やがて樂屋口へ押  
しかけて來て、天昇氏に詫びて、是非語り續  
けて下さいと懇願する騒ぎに天昇氏は、

『まだ皆様は歸られぬのか』と訊き、  
『それは氣の毒でした。皆様に云ひ放して  
は濟まぬ。それでは語らう』と巴津昇師と歸り  
仕度のまま高座へ現れて氣持よく語られた。  
聴衆もこれには喜びの聲を發し目出度く歡  
會した。

が、怒る時間と和が時間との間に、殆ど間  
一髪をも入れぬ心轉換であつた。  
大抵の人なら、もう語らずに歸るのが普通  
で、氏は

所  
感

藏 田 都 鳥

昨秋日本橋俱樂部で舉行された第二十四回  
東都五十義大會に出演致し、計らずも一等の  
榮賞を獲得し、爰に此度御誌を通じて諸先輩  
並びに素義愛好の諸氏に對して、其所感を述  
ぶる事は、私の最も光榮にして且つ欣快と存  
する次第で御座います。

東都に於ける第一流級の先輩多數御出演に  
相成りし其中に伍して、自分の如き斯會に投  
じて日尙ほ淺く藝道も到つて未熟なる者が一  
等の榮冠を獲得し得た事を最大なる喜びと共  
に、又一面御推輓に與りし審査員諸氏及御後  
援を賜はりたる大方に對し、果して今後自分  
が此身に餘る此榮位を汚す事なくよく保ち得  
られるや否やと云ふ大いなる心勞を感じざる  
を得ません。

最も後輩たる自分が一等に入賞し得た事に  
就いて次の如き二道に分類して愚考して見た  
いと思ひます。即ち第一に藝の巧劣、第二は  
語る氣持、態度これでありませう。前者に對し  
ては現在は全然自信無く將來とて大して期

『それでは語らう』と、氣持よく語られたその剛腹には、實に敬服した。

聞けば本年は納會は百餘回掛け廻られたさうだが、人格と人氣と打揃つてゐる點、この人の右に出づる人はあるまい。

これは近頃素義會の美談で、秀吉の陣中會議に一武士を首打ちにする處を、地行増加に一轉したといふ話の儘で、近來嬉しき快報として、以上御照會する。

## 近江清華氏

### わが隨感錄

出版

舊臘、慈雨書洞から『相場道三十年わが隨感錄』が出版された。著者は清華近江秀明氏で人生、百卷の書取るに足らず、相場に於ける其人の持味、自然力と人間力、相場に於ける理論と實際、群集の力、金力の限度、時代の力、時の力、あの頃この頃、苦闘の快味、確信と第六感、自我放棄、無理のある人生、達

人等百四十頁より成り、氏が斯の道に三十年の永きに亘て體驗された感想を、作らず、飾らず、氏獨特の筆を以て諷箴され、世にありふれた株界の著者と異り、迷はず感はず好同伴として熟讀すべき名著である。(一冊金貳圓發行所四谷區鹽町一ノ八慈雨書洞)

謹賀新年

## 帝都素義聯合會

待をかけられぬ事と思ふて居ります。然し乍ら後者に到つては玄素何れの諸氏に對しても譲らぬ覺悟を有して居ります。これを些か具體的に説明致しますと、私の兩親は最も熱心なる愛義家です。而して私の義太夫節を一度も聞く事なくして鬼籍に入りました。私がそも義太夫淨瑠璃を習ひたく成りました第一の動機は、今は亡き兩親の魂への呼びかけて有つて、従つて自分は「送り」「枕」と段々と語り進むにつれて場内一面これ父の姿となり母の佛と成ります。故に悲歎場になりますと自分も自然に涙が出てきます、ほんとうに泣けて來ます。

藝の巧劣、聴衆の聲援そんなものは眼中に無くなります。只々死物狂ひになつて語ります。少くとも二三捨分のその間は此病弱なる私の肉體に或る神秘的なる靈力の働きかける事を意識致します。従つて其翌日は失神したかの如く疲れて床に就く事が度々有ります私の淨瑠璃に少しでも良き箇所が有つたとしたらそれは恐らく以心傳心審査員諸氏に此氣持が通じたのでは無いかと思つて居ります。最後に一言忘れてはならぬ事は師の恩です由來都太夫は自分が十六歳位ひよりの馴染で

主	本
催	社

## 第拾二回 淨曲振興會

◇：東都に名だゝる上品な素淨瑠璃の會として真きを置かれてゐる本社主催の淨曲振興會の第十二回は十二月廿一日午前十一時より例に依つて白木屋ホールに開催。

◇：昭和十年度の納會として多忙な暮にも拘らず、開場早くも満員の盛況。當日は東都素義名流の出演とて、聴衆は序席から大喜びで最後迄立たせずに、語り込まれた諸氏の手腕には今更敬服に價する。

**太 十 安藤 都昇氏**

絃 竹本都太夫

久振りの語物とて張り切つた出來で、一一の文句にも、充分研研が行き届いて流石に知識人の淨瑠璃であつた。

**新口村 高瀬 操氏**

絃 野澤道之助

老巧なる語り口で、忠兵衛、梅川、孫右衛門と語り生かされて、情合も暖に應

へた。近頃の聞き物であつた。

**合 邦 平井 壽樂氏**

絃 竹本朝見太夫

氏の十八番物とて、調べ抜いた苦心の後も手に取るやうに解り、もつと後をと思つてゐると「納戸」迄で終られたは残念。

**壺 坂 水戸部 壽氏**

絃 鶴澤 鶴玉

澤市の飛込み迄、手一杯の大出來で、近來氏の上達せられたには記者も一驚を喫した。益々精進を祈る。

**安達三 霜島 錦司氏**

絃 豊澤扇之助

横濱にその人有りと知られた同氏「見返り」より「御大將」に飛んだが、熱演に加へて素晴らしい美聲で見事なもの。

ありまして、實にサツパリとした江戸ツ子で人間的にも大好きでした。私が去る五月都部屋へ入門して師弟關係を結びまして以來、尙ほ更ら此感を深う致します。其教授法の如き非常に研究せられて居りまして、嘸ぞ疲れるだらうと恐縮致す位で有ります。其氣分熱心に對して一生懸命にならざるを得ません。又師の息都昇氏といふ良き助言者が居て何に彼と導いて呉れます。私は實によきコンディションのもとに有ります。今後一層斯道に精進して上達を期したいと念じて居りますが、淺薄非才果してよく此事を爲し得られますや否や頗る疑問なきを得ません。何卒愛義の諸賢一層の御聲援と御鞭撻を賜りたく懇願致す次第で御座います。

謹賀新年

下戸庵

美登利

大井海岸町二五七六  
電話大森 四四八番  
九二八番

忠 四 寶藏寺天昇氏

絃 竹本巴津昇

「花籠より」丸一段の力演はいつも乍ら堂々たる所演で、流石は、東都素義界の惑星らしい眞打振りであつた。

謹賀新年

澤 絃 彌

### 本社 主催 二大催しの床世話變更

從來、本社主催の身振劇入り東都義太夫會と、素淨瑠璃淨曲振興會の床世話は秋孝が擔任致してをりましたが、今年度よりは、出演諸氏の希望もあり、東都義太夫會は小米が擔當する事となり、淨曲振興會のみは從來通り秋孝がこれを受持つ事になりました。尙、兩會は今後共平等に床世話の時々變更する事としました。また床世話連には本社主催の兩會のカゲ口をきく者もあるやう風聞あれど、左様な者は一切本社にては使用せぬ事を、こゝに改めて書添えておく次第である。

### ◆ 御禮と御通知 ◆

美登利事 三ツ木鐵五郎

扱承らく御交際を願ひましたが彌々上ると絶縁せねば成らぬ事になりました理由は私儀今迄二本有りました齒が取れて仕舞ましたので、丸きり語れなくなりましたに就ては、露骨に申ますと、皆様のをうかがふ事もいやなのです、うかがへばかなしい様な口惜しい様な變てこな氣持に成ますので、いつそ思ひ切つてと決心をいたしました。そこで御禮を兼て上ると絶縁いたしました事を御通知いたします。是が本當の(はなし)です。

◇◇◇ 今日までの我慢 ◇◇◇

長谷川文久

福助事長谷川文久氏は五反田にも同店を開業するなど、最近素晴らしい勢ひで發展しつゝあつたが、今夏七月より起工して、赤松丸木造りの頗る濫好みに疑つた同業では稀な堂々たる新居を、淺草象湯町に建築して、十二月九日落成、千束町から目出度引越しをした氏は左の如く語られた。

僕は廣島からぼつと東京へ出たもんだが、出た時に上野の西郷さんの銅像の下で腕を組んで睨と考いた。義太夫は飯よりも好きだが成功する迄は語るまい、第一稽古をしてうまくなつたら師匠も人も捨て、置かぬ、それこそ一步踏み過つたらヘンな太夫にならねばならぬ、これは斷然六十になるまで師は取るまい、稽古はすまいと堅く決心をした、だから、今日まで僕は師匠といふものがない、二十幾年、實によく辛抱をしたが、六十になつた今年からは大に語つて好きな道を樂しみたいと思ふ。

太棹社  
彙報

▽通信又は番組御送附なきものゝ、本欄に掲載洩れは御用捨を願ひます。  
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。但し語り物又は出演者の變更された場合は重ねて掲載する事もあります。  
▽太棹巡禮記に書きました際は本欄にその重複を避けます。

— 記 者 —

巴津天會新年會

同會は毎年一月八日恒例として新年義太夫會を開催して來た處、本年は會長實藏寺氏病氣の爲め延期、去る十八日午後三時より小石川俱樂部に開催、終て例に依り盛宴を開いて目出度く散會した。

橋辨慶(染廣、歌子) 宿屋(龍昇、染

廣) 揚屋(巴津龍、染廣) 玉三(春巖太夫、染廣) 柳(扇賀太夫、歌子) 曾我對面(掛合) 工藤(天昇) 十郎(和國太夫) 五郎(良造) 虎(染廣) 少將(歌子) 近江(津彌太夫) 八幡(文之助) 梶原(扇

賀太夫) 朝比奈(巴津昇) 合邦(津彌太夫、染廣) 太十(壽昇、巴津昇) 壺坂(勝

助、歌子) 忠九(天昇、巴津昇) 忠七(掛合) 由良之助(天昇) 平右工門(巴津昇) おかる(小津賀) 力彌(歌子) 重太郎(扇賀太夫) 彌五郎(津彌太夫) 喜太八(巖春太夫) 絃(米翁)

都連の結成

昨年下半年から、頻に活氣を呈して、

最近、何々會といふ會名を有する團體

次第に隠然たる勢力を有ち出した竹本都太夫連が新春を期して、都連といふ素義な素義の傳統を以て、連と稱したもので團體を結成し、華々しく一月十八日夕刻より深川常盤俱樂部にその初會の初聲を

られて、早くも好感を以て迎へられた。都連は師匠に都太夫師を戴き、會長には、

宇都宮市々會議員の中にも、その人有りと知られ、最も重きを置かれてゐる松田光氏が就かれ、會計は藏田都鳥氏に廻つたが、病身の方とて、變つて國井やまと氏がなられた。

この結成に就き、會長松田光氏は、

「都連は、都太夫師を中心とする我々素義の會で、近來不遇の位置にある義太夫を、少しでも多くの人々に宣傳したいといふのが第一の目的で、それに都太夫師を後援したいといふ意味を含まれてゐるのは、當然で、極くもう家庭的な和かない、團體に致したく、微力乍ら、聊か素義界に盡したいと思ふてをります」と語られた。

十八日初會の番組は次の通りであるが當夜は長平氏の應援もあり、又巻頭掲載の如き記念撮影をして永く同會の發展を期した。

尙、記念品として都連名人の手拭を配付したりして、今後同連の發展は大いに期待すべきものがあらう。

廿四孝(都丸、都雀) 日吉三(京子、會長挨拶(松田光) 酒屋(光、都雀) 鮎都太夫) 新口村(都昇、都太夫) 太十(や屋(長平、文之助) まと、都太夫) 鈴ヶ森(都鳥、都太夫)

## 淨瑠璃義太夫大會(第一回)

大日本淨曲協會主催のもとに一月廿三廿四兩日仁壽講堂にて開催し、日本帝都義太夫因會、女子淨瑠璃研究會の兩會員出演。

初日男子部 車曳(掛合) 時平公(相模太夫) 松王(近衛太夫) 梅王(巴太夫)

### 謹賀新年 貸並木俱樂部

淺草・雷門  
電話淺草一二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す俱樂部  
部で御座います。

どちらからも最も便利で、落ついて聴くお方まできつと喜びます。  
乗物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

櫻丸(朝見太夫) 雑色(巖太夫) 絃(道之助) 八百屋(巴太夫、文之助) 沼津殿 母太夫、團八、ツレ童市) 酒屋(朝見太夫、芳太郎) 太十(相模太夫、司好) 寶引(彌國太夫、扇之助) 紙治(湊太夫、猿平) 先代(巖太夫、猿藏) 新口(都太夫、糸造) 陣屋(近衛太夫、團市) 合邦(津賀太夫、紋左工門) 野崎(掛合) お光(素昇) お染(猿司) 久松(靜香) およし(越道) 母(重子) 久作(伊達子) 絃(三生、ツレ紋教)

二日目(女子部) 曾我對面(掛合) 工藤(猿司) 五郎(越道) 十郎(靜香) 虎(重子) 少將(小津賀) 龜鶴(素昇) 近江(佳照) 八幡(越駒) 鬼王(伊達子) 朝比奈(壽鳳) 鰻谷(素昇、三生) 岸姫(伊

達子、勝八)揚屋(猿司、仙玉)宿屋(靜香、猿玉)油屋(越道、仙玉)近八(重子、清子)安達(壽鳳、清一)大文字屋(小津賀、紋教)寺子屋(佳照、清一)鮮屋(越駒、紋教)日吉(掛合)五郎助

(殿母太夫)女房(彌國太夫)おまさ(巴太夫)竹松(朝見太夫)茂助(近衛太夫)本下(相模太夫)早太(巖太夫)絃(寛三郎)

## 五十義會番組掲載豫告

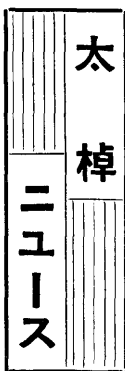
本誌が相當なる犠牲を拂つて、五十義會の第一回よりの番組を掲載して、今向

斯界に貴重な資料とし重要視され、一躍市價を高からしめ、今尙陸續と御註文あるに鑑みて、その番組の掲載を豫告致したる所、早くも掲載を鶴首せられてゐる向きも多く、本社も原稿募集に大いに努力してゐる次第であるが、御覽の通り新年號は記事満載にて、来る二月號には第一回より最近の番組を満載し、併せて五十義會前會長並に古老先輩諸氏の思ひ出を掲載し、貴重な文獻と致たく存じます。

目下五十義會は、解散の中にあるが、この時東都に古き傳統を持つ同會の文獻

は、必ずや皆様の御期待に添ふ事と、茲に豫告する次第であります。

右何卒御期待下さいませやう、一寸御挨拶申し上げます。



◆日本帝都義太夫因會と改稱した東京因會の諸氏は、舊臘廿五日回向院の義太夫祖先並に故人太夫三味線の墓に詣づ。

◆同廿七日因會新舊役員の會合を赤坂『幸樂』に催し、竹本津賀太夫、梅本香伯、豊澤猿之助、竹本相模太夫、鶴澤寛三郎、鶴澤紋

左衛門、竹本殿母太夫、竹本近衛太夫、豊竹巖太夫、豊澤猿藏、豊澤團八、豊澤團吉諸氏出席、豊澤雷助氏は病氣欠席。

◆聲友會のとをる、吳羽、語松、金鳳、みやこの諸氏は一月廿六七日熱海温泉に於て新年義太夫會を開催。

◆鶴澤綱之助連の新年義太夫會は十日新宿伊勢丹ホールにて阪東勝治一座身振劇入にて開催。

◆野澤道之助連の新年會は十三日大森『松淺』にて開催。

◆日本帝都因會の新年會は總會を兼ね十五日辨松樓上に開催。



◆奥野蘆水氏 横濱市中區長者町五ノ六三へ轉居。

◆竹本殿母太夫 因會役員となる。

◆竹本東太夫 因會役員辭退。

◆豊竹益太夫 熱海にて病後静養中。



## 大阪

石渡 鐵 牛

## 日乃出俱樂部十日間

老齡の無聊に足を傾けたのは正月の五日で盛場とて聴衆は滿々と占座して居た。大阪の淨瑠璃クラブ定席とも唱ある此クラブは聴衆の歡迎には年我年中犠牲を拂つて素義家を満足する事には勉めて居る。

隨つて一年三百六十五日の殆んどは何時入場しても素義は催されて居るから斯道の代表クラブと名づけてよい。

さて一言したきは、此十日間に於ける會名は新年素義賑興會として産婆役の林やなぎ氏が尻り輕に奔走され二日以来十一日まで(十日間)借切つて火蓋を切つたが、此十日間連夜賑はした事は昭和十一年丙子素義の發芽前へと云ふべく祝福すべき特筆たるものであらう。茲に太棹に因んで掲載を冀ふ次第である。

- (二日) 陣屋(美奈登) 酒屋(三玉老) 壺坂(貴樂) 新口(やなぎ) 宿屋(開笑) すしや(春好) 太十(錦城) 大切合邦(掛合) 合邦(錦城) 玉手(七福) 淺香姫(春好) 俊徳丸(やなぎ) 母親(開笑) 入平(連友) (三日) 沼津(美奈登) 瀧(三玉老) 菅四(白水) すしや(やなぎ) 儀作(開笑) 佐太村(春好) 太十(錦城) 大切堀川(掛合) 與次郎(やなぎ) お鶴(南幸) お俊(春好) 傳兵衛(七福) 母親(開笑) (四日) 太十(美奈登) 四ツ谷(開笑) 菅四(三玉) 壺坂(やなぎ) 安達三(春好) 大切野崎村(掛合) 久作(七福) お光(春好) お染(やなぎ) 久松(開笑) 母親(山石) 下女(連友) (五日) 忠六(三玉老) 揚屋(やなぎ) 太十(奥村三玉) 沼津(錦城) 安達(丸〇) 糸東枝 赤垣(龜鶴糸東枝) 松王郎(開笑) 城木屋(一花) 大切新口村(掛合) 忠兵衛(やなぎ) 梅川(開笑) 捕手(山石) 下女(錦城) 孫右衛門(キリン) (六日) 鈴ヶ森(やなぎ) 本下(美奈登) 玉三(三玉老) すしや(錦城) 菅四(昇) 志渡寺(開笑) 大切忠臣藏(一力茶屋場) 總掛合 由良之助(七福) 九太夫(開笑) 重太郎(理昇) 彌五郎(錦城) おかる(竹千代) 力彌(南幸) 喜太八(一木) 仲居(やなぎ) 件内(やなぎ) 亭主連中 仲居(源花) 平右衛門(昇) (七日) 草履打(やなぎ) 新口(一木) 忠六(小鷹) 先代(美奈登) 長局(三玉老) 酒屋(錦城) 大切城木屋(橋本一花糸福子) で一段を左こそと陶醉させた、人形劇の細評は次號を籍りてあらはに試みるのも遅くはあるまい。(八日) 質店(やなぎ) 太十(三玉老) 玉三(三ツ恵) 沼津(昇) 百度平(開笑) 岸姫(七福糸福枝) (九日) 合邦(三玉老) 荳萱(やなぎ) 鳴戸(お弓、七福) お鶴、源花、糸福枝) 油屋(開笑) 太十(一木) 先代(錦城) 三日太平記(貴昇) 十日の演題は如何なるや書寫しを無にしました陳謝。 (十一日) 組打(やなぎ) 菅四(かなや) 鳴戸(三玉老) 本下(七福) 太十(小角) 揚屋(開笑) 山科(一花糸福子) 大切柳(かけ合) お柳(三ツ恵) 平太郎(開笑) 和田四郎(理昇) みどり丸(やなぎ) 母親藏人(南幸)
- なほ十日間の立三味線は松葉家の門、尊澤千代子で、東枝、源花の補助と及び福枝、福子の兩婦人で、大盛會のもとに目出度千秋樂を告げた。

## 野澤吉右連

一月七日大東俱樂部にて開催、出演者並に語り物左の通り

日吉(芳生) 先代(寛司) 陣屋(一松) 十種香(房子) 儀作(龜遊) 上爛屋(勇樂) 酒屋(ろ昇) 堀川(快蝶) 補絃(竹本龍助)

## 素義淨瑠璃會

淨曲獎勵會の主催で、桐竹門造指導乙女文樂人形入にて一月十四日より道頓堀俱樂部に於て左の番組の如く賑々しく開催、非常な盛況を極めた。

太十(掛合) 重次郎(よぶく) 初菊(東光) みさを(一松) さつき(樂司) 久吉(榮司) 光秀(角大) 絃(吉右) 上かみや(勇樂、吉右) 戀十(榮司、吉右) 城木屋(龜水、龍助) 鮎屋(紫紅、重造) 山名屋(ふんど、仙二郎) 逆櫓(快蝶、吉右) 寺子屋(松玉、仙二郎) 河庄(掛合) 治兵衛(小若) 太兵衛(ふんど) 小春(可昇) 善六(松玉) 孫右工門(生樂) 亭主(龜水) 見物人(勇樂) 絃(仙二郎) 阿古屋(掛合) 重忠(櫓) 榛澤(紫紅) 岩永(梅曲) 阿古屋(和鳳) 絃(龍助) ツレ(龍三郎)

三曲(仙三郎)

## 桑港

杉山陶岳

## 忘年義太夫大會

十二月十四、十五兩日開催の豫定を十五日一日に變更し、午後六時より日會ホールに於て本年最後の桑港義太夫會を催し、忘年氣分で大にうなつた。

忠三(小林才胸) 太十前(宮本要) 同奥(兼廣廣玉) 日吉(田中氏樂) 沼津(武田徳昇) 朝顔(石川夫人) 壺坂(西本西紫) 酒屋(細田眞玉)

## 計報

## 武井平一郎氏

武井平一郎氏は一月四日午前五時半急逝された。氏は辨松總本店主松樂玉井仙太郎氏の女婿にて、新橋演舞場食堂の主任たりしが、早逝は惜しき極みである。享年四十六、澁谷隠田の自宅にて六日午後一時より盛大な告別式が行はれた。

## 豊澤猿藏師母堂

豊澤猿藏並に同猿三郎兩師の母堂京谷春子刀自は、温顔いつも變らぬ和やかさに、老齡頗る元氣であつたが、去る十七日午後四時十分永眠。刀自は故鶴澤才造師の妻女として前記兩兄弟及び清水氏に嫁したるはな子さんの三兒をよく教育して今日に至る、十九日鶴藏町の自宅にて盛大な告別式が行はれた。享年七十七。哀悼の意を表す。

## 編輯後記

▼昭和十一年の春を迎ひ、先以て皆様の御健勝を祝福申上ます。  
▼新年號だけは早く出したいと思ひ乍ら、三日から急性座骨神經痛再發の爲め編輯遅引いたしました。遂々毎月の發行日と同じになつてしまひました。  
▼本號に掲載致す管でありました五十義會最初よりの番組は、別掲の如く、前會長を初め古老諸氏の御高説と共に次號を飾る事に致しました。御期待の程を願上ます。  
▼『太十』の解題は紙面の都合上いま一回休載いたし、次號に完結を告げる事に致します。  
▼本社主催松屋及び白木屋の二大會、本年も不相變倍舊の御後援御出演を賜り度く偏に御願ひ申上ます。(芳河士)



謹賀新年

名物 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合  
御進物用……金壹圓より

趣味の名菓

★★★  
名なし草  
★★★

花の名にちなめる小形菓子  
三十餘種を取あはせたる純  
江戸趣味の御菓子

御進物用かん入  
風流壺入  
はかり賣 金八拾錢より

前宮天水橋本日

店本堂原三

番六六六二町場茅話電

▶▶▶ 年 新 賀 謹 ◀◀◀

太 棹 社

主幹 富取芳河士

富取三久子

寫真部 河崎秋嶺

大阪支部 石渡鐵牛

桑港支部 杉山陶岳

(イロハ順)

(員 客)

田田 薄田 泉田 中村 西男  
田村 藤田 鶴蛙 斬煙  
安齋 藤宅 孤拳 三夫  
齋三 藤宅 孤拳 三夫  
平山 蘆江

後本  
援誌  
名譽  
會員

(イロハ順)

(東京之部)  
須賀 鳳氏 廣氏 朝氏 一氏 一氏 一氏  
高島 廣氏 朝氏 一氏 一氏 一氏  
鈴木 一氏 一氏 一氏 一氏 一氏  
岡崎 六氏 六氏 六氏 六氏 六氏  
吉川 浪氏 補氏 昇氏 昇氏 昇氏  
平野 六氏 六氏 六氏 六氏 六氏  
綿貫 六氏 六氏 六氏 六氏 六氏  
松本 春氏 春氏 春氏 春氏 春氏  
嘉喜 春氏 春氏 春氏 春氏 春氏  
和田 春氏 春氏 春氏 春氏 春氏  
北島 春氏 春氏 春氏 春氏 春氏  
平田 和氏 和氏 和氏 和氏 和氏  
中澤 和氏 和氏 和氏 和氏 和氏  
竹内 和氏 和氏 和氏 和氏 和氏  
安藤 和氏 和氏 和氏 和氏 和氏  
吉田 和氏 和氏 和氏 和氏 和氏

藏田 都鳥氏 堀田 都鳥氏 安藤 都鳥氏 保藤 都鳥氏 福田 都鳥氏  
神馬 柳氏 神馬 柳氏 神馬 柳氏 神馬 柳氏 神馬 柳氏  
本馬 柳氏 本馬 柳氏 本馬 柳氏 本馬 柳氏 本馬 柳氏  
鈴木 柳氏 鈴木 柳氏 鈴木 柳氏 鈴木 柳氏 鈴木 柳氏  
小林 柳氏 小林 柳氏 小林 柳氏 小林 柳氏 小林 柳氏  
本林 柳氏 本林 柳氏 本林 柳氏 本林 柳氏 本林 柳氏  
大本 柳氏 大本 柳氏 大本 柳氏 大本 柳氏 大本 柳氏  
飛石 柳氏 飛石 柳氏 飛石 柳氏 飛石 柳氏 飛石 柳氏  
加藤 柳氏 加藤 柳氏 加藤 柳氏 加藤 柳氏 加藤 柳氏  
紺藤 柳氏 紺藤 柳氏 紺藤 柳氏 紺藤 柳氏 紺藤 柳氏  
竹内 柳氏 竹内 柳氏 竹内 柳氏 竹内 柳氏 竹内 柳氏  
松尾 柳氏 松尾 柳氏 松尾 柳氏 松尾 柳氏 松尾 柳氏  
大尾 柳氏 大尾 柳氏 大尾 柳氏 大尾 柳氏 大尾 柳氏  
田口 柳氏 田口 柳氏 田口 柳氏 田口 柳氏 田口 柳氏

正田 龍氏 井上 龍氏 金井 龍氏 乃村 龍氏 片山 龍氏 宮本 龍氏  
萩原 龍氏 矢富 龍氏 乃富 龍氏 乃富 龍氏 乃富 龍氏  
高野 龍氏 高野 龍氏 高野 龍氏 高野 龍氏 高野 龍氏  
中野 龍氏 中野 龍氏 中野 龍氏 中野 龍氏 中野 龍氏  
本城 龍氏 本城 龍氏 本城 龍氏 本城 龍氏 本城 龍氏  
石川 龍氏 石川 龍氏 石川 龍氏 石川 龍氏 石川 龍氏  
國井 龍氏 國井 龍氏 國井 龍氏 國井 龍氏 國井 龍氏  
瀧脇 龍氏 瀧脇 龍氏 瀧脇 龍氏 瀧脇 龍氏 瀧脇 龍氏  
加藤 龍氏 加藤 龍氏 加藤 龍氏 加藤 龍氏 加藤 龍氏  
松林 龍氏 松林 龍氏 松林 龍氏 松林 龍氏 松林 龍氏  
鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏  
鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏 鈴木 龍氏  
是澤 龍氏 是澤 龍氏 是澤 龍氏 是澤 龍氏 是澤 龍氏  
田澤 龍氏 田澤 龍氏 田澤 龍氏 田澤 龍氏 田澤 龍氏  
水戸 龍氏 水戸 龍氏 水戸 龍氏 水戸 龍氏 水戸 龍氏  
原田 龍氏 原田 龍氏 原田 龍氏 原田 龍氏 原田 龍氏

松岡 龍氏 杉山 龍氏 寶藏寺 龍氏 島田 龍氏 大田 龍氏 松本 龍氏  
及川 龍氏 大塚 龍氏 大塚 龍氏 大塚 龍氏 大塚 龍氏  
寺岡 龍氏 寺岡 龍氏 寺岡 龍氏 寺岡 龍氏 寺岡 龍氏  
波多 龍氏 波多 龍氏 波多 龍氏 波多 龍氏 波多 龍氏  
木村 龍氏 木村 龍氏 木村 龍氏 木村 龍氏 木村 龍氏  
平井 龍氏 平井 龍氏 平井 龍氏 平井 龍氏 平井 龍氏  
中間 龍氏 中間 龍氏 中間 龍氏 中間 龍氏 中間 龍氏  
細川 龍氏 細川 龍氏 細川 龍氏 細川 龍氏 細川 龍氏  
金田 龍氏 金田 龍氏 金田 龍氏 金田 龍氏 金田 龍氏  
井田 龍氏 井田 龍氏 井田 龍氏 井田 龍氏 井田 龍氏  
菊地 龍氏 菊地 龍氏 菊地 龍氏 菊地 龍氏 菊地 龍氏  
錦地 龍氏 錦地 龍氏 錦地 龍氏 錦地 龍氏 錦地 龍氏  
霜島 龍氏 霜島 龍氏 霜島 龍氏 霜島 龍氏 霜島 龍氏  
川奈 龍氏 川奈 龍氏 川奈 龍氏 川奈 龍氏 川奈 龍氏  
猪谷 龍氏 猪谷 龍氏 猪谷 龍氏 猪谷 龍氏 猪谷 龍氏

近白松桑小佐高武濱田伊秀山平菊玉鈴橫吉三高岩秋  
 江井岡原黑野品笠口口藤 田井地井木井 田 壽壽壽秋松松三 瀨 田 山  
 茂 里 美 美 美 一 宏 秋 司 松 秀 壽 壽 壽 秋 松 松 三 地 美 登 末 た  
 華 華 雄 峰 玉 昇 重 亮 華 重 猿 峯 瓢 樂 月 樂 寶 由 句 利 操 成 か  
 氏

湯原清司氏  
 日野靜波氏  
 (地方之部)  
 米國平野一昇氏  
 同武榮玉氏  
 同杉山陶岳氏  
 同武田德昇氏

同兼廣廣玉氏  
 同西本西紫氏  
 樺太宮下杉鳳氏  
 大阪毛受輝頭氏  
 足利福田都氏  
 静岡村岡壽樂氏

新名譽會員

猪谷銀水氏  
 濱口秋華氏  
 中島山鳥氏  
 松林福笑氏

右の諸氏今回本誌後援名譽會員御快諾を賜り難有奉深謝候

太棹社

定 價 廣 告 料 (行發回一月毎) 號 二 十 七 第

一	部	金三十錢	郵稅二錢
六	月	分金一圓八十錢	郵稅共
一	年	分金三圓	郵稅共
廣	告	料	一頁 金貳拾圓
特	別	一	頁 金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
 ▼誌代は總て前金御拂込の事  
 ▼なる可く振替に御送金の事  
 ▼郵券代用は一割増但二錢切手の事

昭和十一年一月廿三日印刷納本  
 昭和十一年一月廿五日發行  
 編輯兼發行人 富取壽鹿  
 東京市小石川區音羽二丁目四  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷人 栗原榮松  
 東京市牛込區早稻田町五八  
 印刷所 栗原印刷所  
 東京市小石川區音羽二丁目四  
 發行所 太棹社  
 振替東京三一七八五番

新時代の

要求

使用簡便な

豫防薬

ゴム製品、薬劑等の缺點を除去した無脂肪沸騰性の錠劑で挿入直に溶解し安全な膿壁と殺菌の重復作用を起しよく花柳病豫防の目的を果します。感覺自然的でありますからゴム製品の比ではありません。粘着なく使用後爽快の理想的豫防薬であります。本劑の使用によつて洗滌の必要なく毒物性の危險薬臭等なく連續御使用するも副作用弊害更にありません。

沸騰性錠劑

薬價  
 二錠入 壹円  
 五錠入 貳円  
 十錠入 肆円  
 拾円 拾円  
 前金御注文送料本社負擔

東京市京橋區銀座二ノ三

新潮製薬株式会社

電話京橋二六四五番  
 振替東京七〇一〇八番



關西料理

すつぽん焼なら江戸前蒲焼なら  
 御宴會は大勉強すべて安値に

円六

九段下の名物  
 電話九段二〇五一番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の弾き手も揃へて皆様をお待ち致して居ります。

円六獨特のサービス

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

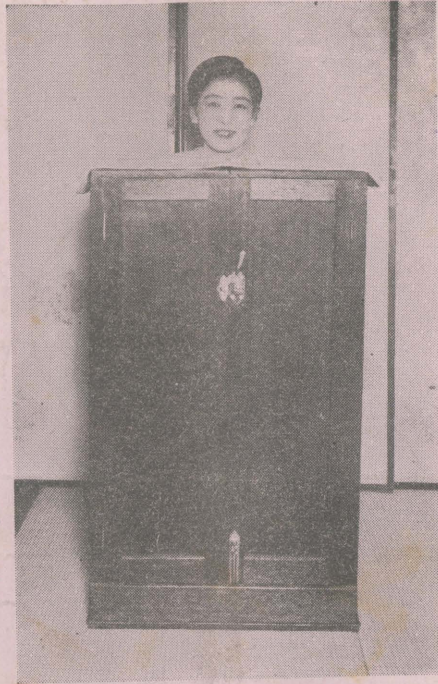
去月屋

新橋二ノ八  
 電銀二〇八



土井醫學博士外諸大家の絶讃を博したる

世界的發明と言はれる「蒸し風呂」



◆御氣分のすぐれぬ方は是非お試しあれ

適 應 症  
 神 經 痛 尿 道 炎  
 一 般 婦 人 病 喘 息  
 胃 腸 病 神 經 衰 弱  
 痔 疾 不 眠 症  
 淋 病 リウマチス

◆血行不順より來る肩のこり冷込み等には特効あり

◇時代が生んだ最新療法!!

◆痛い手術、注射するでなく、呑みにくい服薬することなく療養時間僅か二十分、しかもぼか〜と、暖い春心地の内に、諸症を全治にみちびく、全く理想的療法であります

日本橋區蠣殻町四丁目二番地

日本橋療養所

道順 (市電水天宮下車、新大橋へ向テ左側三ツ目横丁)

料 金  
 一回 金五拾錢  
 七回券 金五圓

許

特